

当館所蔵の「絵入り本」解題②

星 瑞穂

はじめに

本稿は『北の丸』第四五号に掲載した拙稿「当館所蔵の「絵入り本」解題①」に続くものである。

本稿も前回同様、『改訂 内閣文庫国書分類目録』における「国文」の項目に挙げられている資料から、「絵入り本」を抽出して調査し、目録題の順序に拠って解題を掲載する。

なお、「絵入り本」の定義であるが、上記に挙げた「国文」の項目のうち、内容に添う挿絵・地図・図版など、本文中に挿絵を伴うものすべてを対象とした。

【四二】 太平記大全 万治二年刊 五〇冊

内務省旧蔵「請求番号二六七・〇〇八三」

『太平記大全』は『太平記評判秘伝理尽鈔』の影響下に成立した『太平記』の評判書・注釈書である。『太平記』の本文を引き各章段の末尾に『太平記鈔』に拠る注釈を置き、『太平記評判秘伝理尽鈔』の論評・異伝を記載。さら独自論評や注解を加え、またそこに、多くの挿絵が添えられた。

作者は西道智。号を宗庵という。京の人で、もとは医者だったがのち国

学者として多くの著作を残した。主なものに『源氏物語綱目』『徒然草金槌』『平治物語大全』『保元物語大全』などがあるが、明暦から寛文ころに渡る近世前期に執筆活動に専念していたことがわかるのみである。本書もちようどその時期に製作された。

本書は全四〇巻五十冊で出版されている。外題の巻名と函架番号の対応は以下の通り。

第一冊目・「総目録」「剣巻」、第二冊目・「巻二」、第三冊目・「巻二」、第四冊目・「巻三」、第五冊目・「巻四」、第六冊目・「巻五」、第七冊目・「巻六」、第八冊目・「巻七」、第九冊目・「巻八」、第一〇冊目・「巻九」、第一一冊目・「巻十」、第一二冊目・「巻十下」、第一三冊目・「巻十一」、第一四冊目・「巻十二」、第一五冊目・「巻十三」、第一六冊目・「巻十四上」、第一七冊目・「巻十四下」、第一八冊目・「巻十五」、第一九冊目・「巻十六上」、第二〇冊目・「巻十六下」、第二一冊目・「巻十七上」、第二二冊目・「巻一七下」、第二三冊目・「巻十八」、第二四冊目・「巻十九」、第二五冊目・「巻二十」、第二六冊目・「巻二十二」、第二七冊目・「巻二十二」、第二八冊目・「巻二十三」、第二九冊目・「巻二十四上」、第三〇冊目・「巻二十四下」、第三一冊目・「巻二十五」、第三二冊目・「巻二十六上」、第三三冊目・「巻二十六下」、第三四冊目・「巻二十七」、第三五冊目・「巻二十八」、第三六冊目・「巻二十九」、第三七冊目・「巻

三十」、「第三八冊目・「卷三十一」、第三九冊目・「卷三十二」、第四〇冊目・「卷三十三上」、第四一冊目・「卷三十三下」、第四二冊目・「卷三十四」、第四三冊目・「卷三十五上」、第四四冊目・「卷三十五下」、第四五冊目・「卷三十六」、第四六冊目・「卷三十七」、第四七冊目・「卷三十八」、第四八冊目・「卷三十九上」、第四九冊目・「卷三十九下」、第五〇冊目・「卷四十」

ただし、本書の場合、第九冊目の「卷八」と第一〇冊目の「卷九」が欠けており、写本で補つてある。本書の写本は元の版本を見て写したものと思われ、匡郭の大きさや双辺、また挿絵の位置、構図まで正確に再現されている。

本書で特徴的なのは、片仮名交じり文や平仮名交じり文などが混在している本文である。これは典拠として引いているテキストが多岐に渡るためである。

挿絵で特徴的であるのは、物語の一場面に加え、作中の軍勢の陣形や合戦場の地形なども載せている点である。基本的には『太平記』の本文中に物語の挿絵、『太平記評判秘伝理尽鈔』の本文中に陣形などの挿絵が添えられる。この挿絵はおおむね『太平記理尽図経』からの引用である。半丁に一図の場合もあるが、本文中に挿しこまれている場合も多い。本書に関しては、物語部分の挿絵に一部彩色が施されているが、箇所も色もまちまちであるため落書の範囲を出ないものであろう。

なお本書は内務省の旧蔵本であり、明治一二年に購入した。

【書誌】

外題・「太平記大全」左肩四周双辺刷題簽（一八・八糎×四・二糎）

内題・「太平記大全」

表紙・改装縹色表紙（二六・七糎×一九・六糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・第一冊目・四八丁（挿絵なし）、第二冊目・八三丁（二二図）、第三冊目・七四丁（二三図）、第四冊目・五九丁（九図）、第五冊目・六二丁（九図）、第六冊目・四四丁（八図）、第七冊目・七三丁（八図）、第八冊目・八〇丁（七図）、第九冊目・一〇三丁（二〇図）、第一〇冊目・一一〇丁（二四図）、第一一冊目・六七丁（七図）、第一二冊目・五九丁（二七図）、第一三冊目・六六丁（二四図）、第一四冊目・一一一丁（二〇図）、第一五冊目・九二丁（五図）、第一六冊目・八二丁（七図）、第一七冊目・六六丁（四図）、第一八冊目・九九丁（七図）、第一九冊目・八五丁（五図）、第二〇冊目・六九丁（五図）、第二一冊目・九七丁（五図）、第二二冊目・五三丁（二二図）、第二三冊目・一一七丁（八図）、第二四冊目・八九丁（五図）、第二五冊目・七五丁（八図）、第二六冊目・一〇〇丁（六図）、第二七冊目・六〇丁（七図）、第二八冊目・三九丁（三図）、第二九冊目・三五丁（二図）、第三〇冊目・九一丁（五図）、第三一冊目・九六丁（四図）、第三二冊目・八〇丁（四図）、第三三冊目・六八丁（七図）、第三四冊目・七七丁（八図）、第三五冊目・七四丁（三図）、第三六冊目・九五丁（二三図）、第三七冊目・九二丁（八図）、第三八冊目・八八丁（二五図）、第三九冊目・九二丁（二〇図）、第四〇冊目・五三丁（六図）、第四一冊目・七八丁（六図）、第四二冊目・八六丁（九図）、第四三冊目・三八丁（四図）、第四四冊目・九九丁（一図）、第四五冊目・八六丁（二二図）、第四六冊目・七三丁（九図）、第四七冊目・一〇五丁（九図）、第四八冊目・五三丁（五図）、第四九冊目・六六丁（二二図）、第五〇冊目・五八丁（四図）

匡郭・四周双辺（二一・五糎×一六・〇糎）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十二年購求」「久保」（円型陽刻墨印・直径一・七糎）

備考・第一冊目、第二冊目、第三冊目、第一五冊目、第一六冊目、第

二一冊目、第二二冊目、第四五冊目の挿絵に丹緑本風の手彩色が加えられている箇所がある。第一冊目は一六丁目までが「総目録」で、一七丁から四八丁目までが「剣巻」。第一一冊目題簽欠。第二四冊目四四才に付箋。巻が上下に渡る場合、下巻の丁付は上巻最終丁の続きから数え始めている。

【刊年・刊行者】

第五〇冊目五八ウに載る刊記は以下の通り。

「万治二己亥年／仲夏吉辰板行之」

刊年は万治二年五月で、著者・西道智の活動期間と合致する。版元は不明。

【四二】 太平記大全 万治二年刊 四九冊

和学講談所旧蔵「請求番号一六七・〇〇八四」

本書は平仮名交じり文の『太平記』の本文を持つ『太平記大全』で、前掲の内務省旧蔵『太平記大全』（請求番号一六七・〇〇八三）の同版本である。

ただし本書の場合、第二冊目になるはずの巻一が欠けている。また、本来第五〇冊目になるはずの巻四十が第三十六冊目に入っていて函架番号の混乱がある。対応は以下の通りである。

第一冊目・「総目録」「剣巻」、第二冊目・「巻二」、第三冊目・「巻三」、第四冊目・「巻四」、第五冊目・「巻五」、第六冊目・「巻六」、第七冊目・「巻七」、第八冊目・「巻八」、第九冊目・「巻九」、第一〇冊目・「巻十」、第一一冊目・「巻十下」、第一二冊目・「巻十一」、第一三冊目・「巻十二」、第一四冊目・「巻十三」、第一五冊目・「巻十四上」、第一六冊目・「巻十四下」、第一七冊目・「巻十五」、第一八冊目・「巻十六上」、

第一九冊目・「巻十六下」、第二〇冊目・「巻十七上」、第二一冊目・「巻一七下」、第二二冊目・「巻十八」、第二三冊目・「巻十九」、第二四冊目・「巻二十」、第二五冊目・「巻二十二」、第二六冊目・「巻二十二」、第二七冊目・「巻二十三」、第二八冊目・「巻二十四上」、第二九冊目・「巻二十四下」、第三〇冊目・「巻二十五」、第三一冊目・「巻二十六冊上」、第三二冊目・「巻二十六下」、第三三冊目・「巻二十七」、第三四冊目・「巻二十八」、第三五冊目・「巻二十九」、第三六冊目・「巻四十」、第三七冊目・「巻三十」、第三八冊目・「巻三十一」、第三九冊目・「巻三十二」、第四〇冊目・「巻三十三上」、第四一冊目・「巻三十三下」、第四二冊目・「巻三十四」、第四三冊目・「巻三十五上」、第四四冊目・「巻三十五下」、第四五冊目・「巻三十六」、第四六冊目・「巻三十七」、第四七冊目・「巻三十八」、第四八冊目・「巻三十九上」、第四九冊目・「巻三十九下」

版木の磨滅は少なく、また内務省旧蔵『太平記大全』（請求番号一六七・〇〇八三）と比較すると、状態は本書のほうがやや良好。

【書誌】

外題・「太平記大全」左肩墨書打付

内題・「太平記大全」

表紙・改装紺色中字繫型押表紙（二七・三糎×一九・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・第一冊目・四八丁（挿絵なし）、第二冊目・七四丁（一三図）、第三冊目・五九丁（九図）、第四冊目・六二丁（九図）、第五冊目・四四丁（八図）、第六冊目・七三丁（八図）、第七冊目・八〇丁（七図）、第八冊目・一〇三丁（一〇図）、第九冊目・一一〇丁（一四図）、第一〇冊目・六七丁（七図）、第一一冊目・五九丁（二七図）、第二冊目・六六丁（二四図）、第一三冊目・一一二丁（二〇図）、第一四冊目・九二丁（五図）、第一五冊目・八二丁（七図）、第一六冊目・六六丁（四図）、第一七冊目・

九九丁（七図）、第一八冊目・八五丁（五図）、第一九冊目・六九丁（五図）、第二〇冊目・九七丁（五図）、第二二冊目・五三丁（二二図）、第二三冊目・一一七丁（八図）、第二三冊目・八九丁（五図）、第二四冊目・七五丁（八図）、第二五冊目・一〇〇丁（六図）、第二六冊目・六〇丁（七図）、第二七冊目・三九丁（三図）、第二八冊目・三五丁（二図）、第二九冊目・九一丁（五図）、第三〇冊目・九六丁（四図）、第三一刷目・八〇丁（四図）、第三二冊目・六八丁（七図）、第三三冊目・七七丁（八図）、第三四冊目・七四丁（三図）、第三五冊目・九五丁（二三図）、第三六冊目・五八丁（四図）、第三七冊目・九一丁（八図）、第三八冊目・八八丁（一五図）、第三九冊目・九二丁（一〇図）、第四〇冊目・五三丁（六図）、第四一冊目・七八丁（六図）、第四二冊目・八六丁（九図）、第四三冊目・三八丁（四図）、第四四冊目・九九丁（二図）、第四五冊目・八六丁（一二図）、第四六冊目・七三丁（九図）、第四七冊目・一〇五丁（九図）、第四八冊目・五三丁（五図）、第四九冊目・六六丁（一二図）
 匡郭・四周双辺（二二・八糎×一六・〇糎）
 印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」
 備考・卷一欠。第二三冊目および第四二冊目から第四八冊目の計八冊が、さらに改装されて比較的新しい紺色無地表紙になっている。

【刊年・刊行者】

刊記は前掲二書同様「万治三己亥年／仲夏吉辰板行之」。版元は不明。

【四三】 太平記綱目 寛文一二年刊か 六〇冊

内務省旧蔵「請求番号一六七・〇一〇四」

本書『太平記綱目』もまた前掲本同様に『太平記』読解のための参考書

として成立した。本書の近世初期に成立した『太平記』の注釈書・評判書をほとんど網羅・集成しており、さらに「追解」としてこれまでの注釈をさらに補った上、「通考」として独自の論評を加えている。

挿絵は、おおむね『太平記理尽図絵』に拠るが、『太平記評判秘伝理尽鈔』の本文に即して適宜添えられている。物語の場面ではなく作中の軍勢の陣形を再現したもの。ただし、本書に特徴的なのは布陣の図だけでなく、装束や、城攻めに用いた道具などの図も添えられている。文章でわかりにくいものに関しては、積極的に絵を使って解説しようとしているといえる。

第一冊目の冒頭に凡例が載せられ、そこに著者・原友軒の署名がある。またそのあとに村田通信による序文が載る。この部分にはともに「寛文戊申仲夏」と記されており、寛文八年に序が寄せられたことがわかるのだが、ただし、刊末に附された原友軒の手による後序には「寛文壬子春三日」という寛文一二年を示す記載がある。寛文一〇年刊『書籍目録』にはすでに本書が記載されていることからみて、寛文八年には一度出版されたものの、そののち版を重ねて、原友軒が後序を書き加え、寛文一二年に第二版というべきものが出版されたのだろう。なお龍谷大学図書館所蔵本では、この後序が、第一冊目の村田通信の序文のあとに掲載されている。また京都府立総合図書館所蔵本ではこれが第二冊目に載る。おそらくこれは、数種類の版が幾度も出版されたことを示しており、『太平記綱目』の需要の多さが想像されるのである。

なお本書の構成は以下の通りである。

- 第一冊目・「凡例」「総目録」「剣巻」、第二冊目・「序」「卷一」、第三冊目・「卷一附翼上・君臣編上」、第四冊目・「卷一附翼中・君臣編下」、第五冊目・「卷一附翼下・冠服編・邦域編」、第六冊目・「卷二」、第七冊目・「卷三」、第八冊目・「卷四」、第九冊目・「卷五」、第一〇冊目・「卷

六、「第一一冊目・「卷七」、第二二冊目・「卷八奇」、第一三冊目・「卷八正」、第一四冊目・「卷九」、第一五冊目・「卷十本」、第十六冊目・「卷十末」、第一七冊目・「卷十一」、第一八冊目・「卷十二首」、第一九冊目・「卷十二尾」、第二〇冊目・「卷十三」、第二二冊目・「卷十三附翼・遺諫篇」、第二三冊目・「卷十四陰」、第二三冊目・「卷十四陽」、第二四冊目・「卷十五乾」、第二五冊目・「卷十五坤」、第二六冊目・「卷十六前」、第二七冊目・「卷十六後」、第二八冊目・「卷十六附翼・南木家訓」、第二九冊目・「卷十七剛」、第三〇冊目・「卷十七柔」、第三一冊目・「卷一八屈」、第三二冊目・「卷一八伸」、第三三冊目・「卷十九」、第三四冊目・「卷二十」、第三五冊目・「卷二十一否」、第三六冊目・「卷二十一泰」、第三七冊目・「卷二十二」、第三八冊目・「卷二十三」、第三九冊目・「卷二十四字」、第四〇冊目・「卷二十四宙」、第四一冊目・「卷二十五」、第四二冊目・「卷二十六天」、卷四三冊目・「卷二十六地」、第四四冊目・「卷二十七」、第四五冊目・「卷二十八」、第四六冊目・「卷二十九」、第四七冊目・「卷三十」、第四八冊目・「卷三十一」、第四九冊目・「卷三十二」、第五〇冊目・「卷三十三上」、第五一冊目・「卷三十三下」、第五二冊目・「卷三十四」、第五三冊目・「卷三十五雌」、第五四冊目・「卷三十五雄」、第五五冊目・「卷三十六」、第五六冊目・「卷三十七」、第五七冊目・「卷三十八」、第五八冊目・「卷三十九呂」、第五九冊目・「卷三十九律」、第六〇冊目・「卷四十」「後序」

本書の著者・原友軒に関する経歴は京都の人であったという以外不明である。ただし、近世期には『太平記』講釈に関わっていた医者に原姓の人物が多く、また『太平記大全』の著者・西道智もそうであったことから、原友軒も医学を本業としていた可能性がある。序を寄せている村田通信も匏庵と号した医者であった。寛文八年刊『楠木正成伝』、元禄七年刊『匏

庵雜録』などの著者として知られ、俳書・漢詩集などに序を寄せている。本書は明治一二年に内務省が購入したもの。旧蔵者のものと思われる印記に「染井文庫図書記」とある。

【書誌】

外題・「太平記綱目」左肩四周双辺刷題簽（一八・八糎×四・〇糎）
内題・「太平記綱目」

表紙・改装標色表紙（二六・三糎×一九・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・第一冊目・五四丁（挿絵なし）、第二冊目・七八丁（挿絵なし）、第三冊目・六二丁（挿絵なし）、第四冊目・三八丁（挿絵なし）、第五冊目・二六丁（九図）、第六冊目・七〇丁（一一図）、第七冊目・五八丁（四図）、第八冊目・五六丁（四図）、第九冊目・四〇丁（挿絵なし）、第一〇冊目・七七丁（九図）、第一一冊目・八五丁（七図）、第一二冊目・五三丁（六図）、第一三冊目・五二丁（二五図）、第一四冊目・八八丁（二図）、第一五冊目・五六丁（七図）、第一六冊目・六三丁（二〇図）、第一七冊目・五七丁（二図）、第一八冊目・四四丁（八図）、第一九冊目・五三丁（八図）、第二〇冊目・九五丁（九図）、第二一冊目・三五丁（挿絵なし）、第二二冊目・七八丁（九図）、第二三冊目・六九丁（二四図）、第二四冊目・四二丁（四図）、第二五冊目・五二丁（八図）、第二六冊目・七八丁（四図）、第二七冊目・六八丁（六図）、第二八冊目・三二丁（挿絵なし）、第二九冊目・九五丁（二図）、第三〇冊目・四五丁（挿絵なし）、第三一冊目・五八丁（挿絵なし）、第三二冊目・四四丁（挿絵なし）、第三三冊目・九四丁（一一三図）、第三四冊目・七八丁（四図）、第三五冊目・七二丁（二図）、第三六冊目・四五丁（挿絵なし）、第三七冊目・八二丁（三図）、第三八冊目・三九丁（挿絵なし）、第三九冊目・四二丁（挿絵なし）、第四〇冊目・七四丁（挿絵なし）、第四一冊目・九二丁（五図）、第四二冊目・六八丁（挿絵なし）、第四三冊目・

六四丁（挿絵なし）、第四四冊目・六四丁（挿絵なし）、第四五冊目・六四丁（挿絵なし）、第四六冊目・七八丁（挿絵なし）、第四七冊目・一〇〇丁（二図）、第四八冊目・八七丁（二図）、第四九冊目・九〇丁（挿絵なし）、第五〇冊目・七二丁（二図）、第五一冊目・六八丁（挿絵なし）、第五二冊目・七四丁（挿絵なし）、第五三冊目・三八丁（挿絵なし）、第五四冊目・九六丁（挿絵なし）、第五五冊目・九四丁（挿絵なし）、第五六冊目・五五丁（挿絵なし）、第五七冊目・九五丁（二図）、第五八冊目・五〇丁（五図）、第五九冊目・五〇丁（挿絵なし）、第六〇冊目・六四丁（挿絵なし）
 匡郭・四周单边（二三・四糎×一六・五糎）※ただし本文字高は二〇・〇糎。
 頭註字高三・四糎

印記：「大日本帝国図書印」「明治十二年購求」「日本政府図書」「染井文庫図書記」

備考：第九冊目題簽欠。第三五冊目第五七丁と第六七丁が入れ替わっている。

【刊年・刊行者】

卷末に刊記がないため正確な刊年は不明。ただし後序の末尾に「寛文壬子春三日既望操毫／干尾陽之旅館／原友軒（印）」とあるため、本書は寛文一二年以降の出版である。ただし初版は寛文一〇年には刊行されていたと思われる。版元は不明。ただし後序には「書林某」がすすんで出版することを請うた旨が記されている。

【四四】 芳野拾遺物語 天保一二年刊 四冊

町田久成旧蔵「請求番号二〇四・〇〇五七」

本書は一般的には『吉野拾遺』と呼ばれる説話集である。二巻本と三巻本があるが、本書は三巻本で巻三を分冊して四冊としている。主に後醍醐天皇と後村上天皇の治世の逸話や和歌説話を中心に、南北朝時代の説話六四話を収録する。内容は多岐に及び、『徒然草』や『太平記』などに取材して改変したものや、虚構の逸話も併せて載せる。

作者は様々な人物に比定されているが、定かではない。成立年代についても不明で、奥書には「正平つちのと戌の年」という年記があるが、正平年間に「つちのと戌」の干支はなく、「つちのえ戌」の誤記として正平一二年成立とみる向きもあるが、定説をみない。いずれにせよ南北朝時代以降、室町時代のあいだに、南朝に同情的な人物の手によって成立したとするのが穏当とされる。

『吉野拾遺』はまず三巻本が、貞享三年に三冊本として出版されたのが近世における版本の最初である。そのうちこれを四冊本にしたものが、翌貞享四年に出版された。このときの版元は京都の北村四郎兵衛である。

本書はこの貞享四年版を江戸・京都・大坂の三都の書肆が求版して、天保一二年に再版した相合本。元の刊記を削り、その部分に入木修正を加えて三都の書肆名を載せる。

また、本書は町田久成の旧蔵書である。町田久成は書籍館の初代館長であり、書籍館創設に際して率先して蔵書を寄贈した。町田久成の蔵書印には「石谷蔵書」と「町田久成献納之章」という二種の印があるが、本書には後者の印が押されている。

第四冊目の奥書部分が落丁。

【書誌】

外題・「吉野拾遺」左肩四周双边刷題簽（一六・五糎×三・二糎）

内題・「芳野拾遺物語」

表紙・改装縹色布目型押表紙（二二・〇糎×一五・三糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二九丁（二三図）、②二九丁（一一図）、

③一八丁（五図）、④二〇丁（七図）

匡郭・四周单边（一八・〇糎×一三・七糎）

印記・「町田久成献納之章」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・③朱書書入あり。④目録丁付二、本文丁付十九、三十六、三十七欠、

刊記丁付三十八。

【刊年・刊行者】

④二〇オの刊記は以下の通り。

「貞享四丁卯歳正月吉辰／天保十二辛丑歳孟夏求版／三都書林／江戸／山城屋佐兵衛／京／河内屋藤四郎／大坂心齋橋筋博労町角／河内屋茂兵衛」

貞享四年一月に刊行された版を買い取り、天保一二年五月に、江戸の山城屋佐兵衛、京の河内屋藤四郎、大坂の河内屋茂兵衛の三者が合同で再版した。山城屋佐兵衛は江戸日本橋通二丁目に店を構えた書物、折手本問屋である。姓は稲田氏で、玉山堂と号した。唐本、和本をはじめ、いわゆる「物の本」を多く扱っていたとみえ、文化年間から明治期にかけて出版業を営んでいた。京の河内屋藤四郎は、懷玉堂と号した寺町仏光寺通の書肆で、規模はあまり大きくなかったらしく、刊記に記載のある本の残存数はあまり多くない。一方、大阪の河内屋茂兵衛は、群玉堂または群鳳堂と号した心齋橋筋博労町角の書肆で、数多くの出版を手掛けており、曲亭馬琴の『椿説弓張月』の版元としても知られる。もとは同じ心齋橋筋の順慶町に店を構えていたが文化年間に移転した。姓は岡田氏。

なお、貞享四年版の版元であった北村四郎兵衛は、京之軒あるいは杏林軒と号した京の五条通高倉東人の書肆であったが、文久年間に経営が傾いたため出雲寺和泉掾の手代であった武助を後継ぎにして再興させた。この

ときの北村四郎兵衛は文石堂と名乗っている。

【四五】公武栄枯物語 元禄七年刊 八冊

鹿都部真顔旧蔵「請求番号一六七・〇〇五〇」

『公武栄枯物語』は、後鳥羽院が実質的に天皇位に就いた寿永二年から、北条時頼が執権となる寛元四年までを描き、承久の乱の顛末をほぼ史実に則って描いた物語である。

写本・版本ともに残存数が少なく、諸本の異同も少ないことからあまり流布しなかったと考えられている。そのため作者・成立年代ともに不明。本文は『承久記』の前田本・流布本に近似しており、またそれを補うように『吾妻鏡』『増鏡』からの引用もみられ、これらの史料が参考にされて製作されたと思われる。

版本は元禄七年に出版された一種類しかなく、当文庫をはじめ東京大学図書館などに全部で五部が所蔵されているのみ。六卷八冊で挿絵を添える。巻と函番号の対応は以下の通り。

①「序」「卷一」、②「卷一」、③「卷二」、④「卷三」、⑤「卷四」、⑥「卷五」、⑦「卷六」、⑧「卷六」

なお、本書は狂歌作者・鹿都部真顔（北川真顔とも）の旧蔵書である。第八冊目の末尾にのみ円型の蔵書印をみることができ、鹿都部真顔は、恋川好町の名で当初戯作者として出発するも、のち狂歌界で頭角を現し、宿屋飯盛と論争を繰り返して一時代を築いた。一説には、狂歌の点料で生計をたてた最初の人物といわれ、化政期には三〇〇人も弟子がいたといわれている。同時に大変な蔵書家であったことで知られるが、文政一二

年に貧窮のうちに没してその蔵書は散逸した。

また、本書の第二冊目一二ウには、墨書で「巢鴨原街之住／伊勢屋治兵衛／蔵書」とある。これは、本書に押印してある蔵書印のひとつ「イセ治」を押した人物による署名であろう。この人物もまた本書の旧蔵者の一人である。

この「イセ治」の印は、当文庫所蔵の延宝八年版『源平盛衰記』（請求番号一六七・〇〇四三）にも同じものが押印されており、伊勢屋治兵衛も蔵書家であったことが想像されるのである。この『源平盛衰記』は文政九年に昌平坂学問所に新収され、以来当文庫に引き継がれている。つまり、伊勢屋治兵衛が『源平盛衰記』を手放してのち、文政九年に昌平坂学問所に収められたらしい。ただし、本書に関しては、伊勢屋治兵衛が手放したのち鹿都部真顔が手に入れたのか、真顔の死後に散逸した蔵書を伊勢屋治兵衛が手に入れたのか、前後関係は不明である。しかし、真顔の没年と昌平坂学問所の新収時期は近く、いずれにせよ伊勢屋治兵衛という人物は、文政年間の人物であったことは間違いない。

【書誌】

外題・「公武栄枯物語」左肩四周単辺刷題簽（二三・七糎×三・〇糎）

内題・「公武栄枯物語」

表紙・改装小豆色表紙（二三・〇糎×一六・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）①一二丁（二四）、②一二丁（二四）、③二四丁（四四）、④二二丁（四四）、⑤二〇丁（四四）、⑥二四丁（三四）、⑦二〇丁（二四）、⑧一六丁（二四）

匡郭・四周単辺（一八・〇糎×一四・〇糎）

印記・「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「大橋」（楕円型陽刻印一・二糎×〇・八糎）、「イセ治」（楕円型陽刻印一・八糎×一・〇糎）

糎）、「真顔」（円型陽刻印一・四糎）

備考②一二ウに墨書「巢鴨原街之住／伊勢屋治兵衛／蔵書」、⑤題簽欠、⑧一六ウ「真顔」印。

【刊年・刊行者】

⑧一六ウの刊記には、次のようにある。

「元禄七年甲戌立春／江戸日本橋南一丁目／須原屋茂兵衛／京堺町通竹屋町上ル橋町／服部三大寺／板行」

江戸日本橋南一丁目の須原屋茂兵衛は、千鐘房と号した江戸有数の大書肆である。明治三七年に店を閉じるまで、数多くの出版を手掛けた。幕府の御用御書物師を務め、『武鑑』や『江戸絵図』の版元として知られた。須原屋一統の総本家にあたる。一方、服部三大寺は、本書以外の本にみることのできない名前である。本書の刊記にあるとおり、堺町通竹屋町上橋町に店を構えていたこと以外は不明。

【四六】さくらの中将 寛文一〇年刊 一冊

内務省旧蔵「請求番号二〇四・〇〇七九」

『桜の中将』は室町時代に成立した御伽草子のひとつである。桜の中将と呼ばれる美しい公卿が、ある姫君と恋に落ち、若君をもうけるが、中将の父親によって引き裂かれ、難波に幽閉された姫君は死去、中将は世をかなみ出家する、という、悲恋譚である。

しかし、ほぼ同じ内容を持つ『桜の中将物語』と題する写本が国立国会図書館に所蔵されており、この中では、難波で死去したはずの姫君が住吉明神から授けられた妙薬によって蘇生し、中将と共に末永く栄えたという

結末になっている。

御伽草子は出家遁世譚で結末を迎えるものが多いため、これは『桜の中將物語』特有の改作であると考えられる。ただし、本文テキストが最も正しい、古態を表すのはこの『桜の中將物語』である。この他に異本として、『小伏見物語』と題する奈良絵本と、寛文一〇年版の版本系テキストが存在する。

本書は、寛文一〇年に本問屋から出版されたもので、出家遁世譚で結末を迎える、版本系テキストを持つ。本来、上下二冊で出版されたが、本書は合冊されて一冊になっている。その際、上巻の最終丁の裏面（一〇ウ）が欠けたと思われるが、本文に欠落はない。本書にみられる師宣風の挿絵と、一四行という密な版面、すき返しの料紙は、江戸版の特徴である。

「大橋」という楕円型陽刻印（一・二糎×〇・七糎）が見られる。貸本屋のものか。

【書誌】

外題・「さくらの中将」左肩四周双边刷題簽に墨書（一・六・七糎×二・八糎）
内題・「さくらの中将」

表紙・金茶色表紙（二・六・〇糎×一・八・二糎）

墨付丁数・二二丁（一一図）

匡郭・四周单边（二・一・八糎×一・六・六糎）

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「大橋」（楕円型陽刻印）

備考・上下合冊。一〇丁目までが上巻。

【刊年・刊行者】

二二才の刊記は以下の通り。

「寛文十年／正月吉日／通油町／本問屋開板」

本問屋と号した書肆は江戸と京にいくつか見られるが、本書の場合は鶴

屋喜右衛門のことであると思われる。鶴屋喜右衛門はもと江戶大伝馬町三丁目に店を構えていたが、寛文九年頃に通油町に場所を移した。このころの刊記には、本問屋喜右衛門との記載がみられ、年代、屋号ともに本書と合致する。

なお、同年に出版された松会版も存在する。

【四七】わかくさ物かたり 天和三年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇九五」

『若草物語』は前掲書同様、室町時代に成立した御伽草子の一つである。『風葉和歌集』に見える散逸物語『世をうち川』の改作であると考えられている。

主人公の少將は、兄妹のようにして育った姫君・若草と結ばれて娘を授かる。しかし、この結婚に不満な父の大納言によって二人は引き裂かれ、悲観した若草は宇治川に身投げしてしまう。少將は突然姿を消した若草を探して宇治へ向かい、そこで乳母の淡路と出会い、若草の死を知る。少將は娘を実妹の朝日の前に託すと、高野で出家する。そのうち、少將の両親も出家し往生を遂げ、残された朝日の前は三位中将の北の方となり、少將と若草の娘の姫君は、摂政の孫の侍従と結婚して栄える。少將は熊野で往生を遂げる。

前掲の『桜の中將』と近似した悲恋遁世譚であるが、似た構想の作品は他にも多く挙げることができ、鎌倉時代以降の擬古物語の性質を受け継いだ御伽草子の典型的な作品であることが指摘できる。若草の視点に立つてみれば継子いじめ譚ととらえることもでき、これもまた御伽草子には多く

見ることのできるモチーフである。若草の入水や兄妹の恋は『源氏物語』や『狭衣物語』に着想を得たものと思われるが、先行する『世をうち川』も含め、正確な影響関係は不明である。

なお、慶応義塾大学図書館が所蔵する写本では、清水観音の霊験によって若草は救われて中将と結ばれるという結末になっている。

写本の多くは三巻三冊である。版本の場合は版によってまちまちである。主な版は、寛文七年版、寛文・延宝頃版、天和三年版、元禄六年版、宝永四年版、享保六年版、刊年不明版などがある。いずれも挿絵入り。本書はこのうちの天和三年版で、上下巻一冊になっている。寛文七年版の覆刻である。

師宣風の挿絵、一三行の密な版面は、当時の江戸版の特徴である。ただし、本書の挿絵は人物が大きく描かれる傾向にあり、やや特徴的な作風である。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵本であるが、なかでも記録調所に配架されていたもの。

【書誌】

外題・「若草物語」左肩墨書打付書

内題・「わかくさ物かたり」

表紙・朱色布目型押表紙（二五・二糶×一七・六糶）

墨付丁数・二七丁（一四図）

匡郭・四周单边（二一・六糶×一六・一糶）

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「昌平坂」「番外書冊」備考・上下巻一冊に合冊されている。一四丁目までが上巻。

【刊年・刊行者】

二七オの刊記は以下の通り。

「天和三癸亥二月吉日／江戸大伝馬町三丁目／うろこかたや開板」

版元は明暦頃に江戸で出版を始めた書肆・鱗形屋である。当初は遊女評判記などの出版で人気を博し、江戸の出版業界を牽引した。菱川師宣との関係も深かったとみえ、いわゆる師宣絵本も多く手がけている。本書が出版される前年に火災に遭い、多くの版木を失った。そのためか本書が出版された天和三年から四年にかけて再版が相次いでいる。

【四七】（十二段草紙） 刊年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇七三二

『十二段草紙』は『浄瑠璃御前物語』あるいは『浄瑠璃物語』の別名で、諸本が十二段に編集されるに至って始まった呼称である。本書の場合、内題が欠けているため、この呼称が目録書名に採られた。

『実隆公記』文明七年の紙背文書に「じやうるり御ぜん」という記載があることから、『浄瑠璃御前物語』は少なくともこの頃には成立していたと考えられている。作者は寛永八年に没した小野於通に仮託されてきたが俗説の域を出ず、もし仮に実際に何らかの形で関わったとすれば、それまでの諸本を一二段に改作した編者であった可能性があるとされている。『浄瑠璃御前物語』はそれまでは、座頭によって語られた語り物であった。三味線と結びついて新たな芸能となると「浄瑠璃節」という呼称になる。さらにそののち、浄瑠璃節は操人形と結びつき頻繁に上演されたため、操人形芝居のことを「人形浄瑠璃」と呼ぶようになった。以降、近世期を通して様々な文学作品に大きな影響を及ぼす。

内容は、矢作の長者の娘・浄瑠璃姫と、御曹司・九郎義経の悲恋と、薬

師の本地譚である。鞍馬寺を出て奥州へ向かう途上の義経と、矢作の長者の娘・浄瑠璃姫は出会い結ばれる。しかし、二人はまもなく別れ、義経は金売り吉次と共に蒲原宿へ赴く。ところが、義経はこの地で病となり、吉次たちに置き去りにされてしまう。宿の女房は病人の義経を吹上の浜に棄てる。このことを鎌倉若宮八幡の靈験で知った浄瑠璃姫は、苦難の旅の末に吹上の浜へと向かう。そして、砂に埋もれた義経を見つけると、祈誓して蘇生を願う。すると、薬師の靈験によって義経は息を吹き返す。二人は再会を喜び合うが、まもなく再び別れ、義経は奥州平泉へと向かう。三年後、軍勢を率いて上洛する途上、義経は浄瑠璃姫の元を訪ねるが、すでに姫は没したあとだった。そこでその地で姫の供養をすると、五輪が砕け散った。そこで、義経は姫の菩提を弔う寺を建て、都へと攻めのぼった。

この物語は、芸能で享受されると同時、絵巻に仕立てられて絵解きとしても親しまれたらしく、多くの絵巻・絵本が伝存する。

版本として出版されるようになったのは、元和・寛永頃と思われ、古活字版が多く残る。整版としては正保三年に二行本が初めて出版された。その他、寛文元年版、享保七年版などがあるが、これらは一般的に四行本と呼ばれるものである。

本書は刊記を欠くため、刊年や版元は不明。国立国会図書館などにも所蔵されているいわゆる刊年不明版である。行数は一四行。師宣風の挿絵を持つ江戸版である。一部大きく落丁しており、絵も二図ほど欠く。状態はあまり良くない。外題には墨書で「浄瑠璃姫物語」とあるのを、あとから「姫」を消して、その横に「御前」と補って「浄瑠璃御前物語」に直している。元来、上下巻二冊であったものを、合冊して上下一冊にしている。

本書は和学講談所の旧蔵本である。ただし、その他の不明印記として扇型の墨印「本久」というものが押印されている。

【書誌】

外題・「浄瑠璃姫（御前）物語」左肩墨書題簽（一八・〇糎×四・三糎）
内題・欠

表紙・改装朱色表紙（二四・〇糎×一八・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二二丁（七図）

匡郭・四周单边（二一・四糎×一六・〇糎）

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

「本久」（扇型陽刻墨印）

備考・上下巻一冊に合冊。一一丁までが上巻。上下巻のあいだに遊紙一枚。丁付「二」「六」の五丁分が落丁、うち挿絵二図。

【刊年・刊行者】

刊記を欠いているため不明。

【四八】からいとさうし 刊年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号特二二〇・〇〇〇二二

『唐糸草紙』は室町時代に成立した御伽草子で、舞台や素材を源平合戦に採るため、軍記物の系譜を引くものであるといえる。中心となるのは唐糸の娘・万寿の孝行譚であるが、舞の徳を描いた芸能成功譚でもあり、八幡靈験譚をも兼ねる。梗概は次の通りである。

源頼朝の女房である唐糸は、木曾義仲の家臣・手塚光盛の娘である。頼朝が木曾義仲追討を画策していることを知った唐糸は、すぐにこれを木曾に知らせた。すると義仲からは重代の脇差が届き、頼朝を暗殺しよう命じてきた。唐糸はこれを実行しようとするが、しかし、頼朝の湯殿で、隠

していた脇差が見つかってしまい、唐糸は投獄される。これを知った唐糸の娘・万寿は木曾から鎌倉へと上り、母の行方を探るため秘かに御台所の女房のもとへ奉公にあがる。そして下女の口から唐糸の投獄されている牢の在り処を知り、ついに母と再会する。その矢先、鎌倉では舞の上手十二人を召して今様を謡わせることになった。万寿はその最後の一人に選ばれた。そして万寿は見事な舞を披露して、八幡の扉を開くという靈験を起こした。そして、万寿は翌日、頼朝の御前で親の名を明かし、舞の引き出物として母の命と自分の命を引き換えにしてほしいと願う。これを聞いた頼朝は唐糸を赦免し、多くの引き出物と共に母子を木曾へと帰した。

物語は寿永年間を舞台とするが、しかし、木曾義仲追討のくだり以外は史実通りではなく、後世の出来事なども混ざりこんでいることから、この物語の成立は寿永年間よりも大いに下ることがわかっている。『平家物語』や『曾我物語』からの引用も多く、先行する作品群から題材を採っている。『唐糸草紙』も前掲書同様、絵巻・絵本としての享受が多く、人々に親しまれたらしい。享保年間に洪川清右衛門が出版した御伽草子二三編の中にも採用されている。

本書は、版本の中でも最も先駆けて出版されたものである。慶長元和頃に出版された絵入の古活字版で、挿絵には緑と朱を中心に丹緑風の手彩色がほどこされている。行数は一〇行で、以降の絵入製版本の本文はすべて本書に基づくものである。

なお、本書は昌平坂学問所記録調所の旧蔵である。

【書誌】

外題・「からいとさうし」左肩墨書打付

内題・「からいとさうし」

表紙・改装朱色布目型押表紙（丹表紙）（二五・〇糎×一八・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三七丁（二二図）

匡郭・無辺無界（挿絵匡郭・四周単辺（一九・三×一三・八糎））

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「番外書冊」

備考・挿絵の匡郭の大きさにばらつきあり。袋綴が開いている。

【刊年・刊行者】

刊記を欠くため、刊年、版元ともに不明。ただし、本書の古活字の様式などからみて、慶長元和間中に出版されたと想定されている。

【四九】紫式部の巻 明暦四年刊 一冊

内務省旧蔵「請求番号二〇三・〇〇七四」

石山寺の縁起について描いた御伽草子『石山物語』の中で、紫式部が石山寺で『源氏物語』を書く場面が独立し、ひとつの物語として受容されるようになったものが『紫式部の巻』である。

上東門院の命によって石山寺に参詣した紫式部は『源氏物語』を書き始めるが、実は『源氏物語』は菩提を進めるための書で観音の靈験によって書かれたものだった。のちに、石山寺に参籠していた澄憲は観音の夢告により、紫式部のために源氏供養を行う。

『石山物語』は、聖武天皇の大仏建立発願に始まり、やがて良弁僧正が大伽藍を建立して石山寺を作る部分から始まる寺社縁起の流れを汲む御伽草子で、『石山寺縁起』と共通部分を多く持つ。そこに良弁の出生譚など独自の逸話を増補、脚色を施している。『紫式部の巻』はこの第四冊目にあたり、主に謡曲『源氏供養』に拠って物語を展開している。これが独立して所蔵されているのは当文庫や京都大学付属図書館、宮内庁書陵部など

で、極めて稀。本書は明暦四年刊であるが、『紫式部の巻』はそれ以外に伝存をみない。

典拠として『源氏物語』の注釈書である『河海抄』『明星抄』『明星抄』なども引用していることから、成立年代は『明星抄』成立以降の天正頃とする見方がある。だが、『石山物語』の全体像を見ると、直接『石山寺縁起』に取材しているのではなく、『元亨釈書』や『源平盛衰記』からの引用が多く、こうした文献資料に取材した本文製作は、江戸時代前期の傾向であるとの指摘もあり、室町時代成立の御伽草子とするのは誤りで、仮名草子に分類されるものである可能性が強い。明暦四年刊本しか伝存しない点から見ても、成立年代をあまりさかのぼることはできない。作者に關しても不明であるが、いずれにせよ、その典拠とした資料の豊富さからみて、相当な知識人の手によって書かれたことは間違いない。

本書は本文部分に匡郭を持たず、写本の体裁に似せている。字高は一九・〇糎。挿絵は師宣風の画風である。

興味深い点は上東門院が男性として挿絵に描かれていることで、本文にそのような内容はないので、その名前から絵師が上東門院を上皇と間違えたものかと思われる。

なお、本書は内務省の旧蔵で、明治一三年に買い求めたものである。

【書誌】

外題・「紫式部の巻 全」左肩墨書打付

内題・「紫式部の巻」

表紙・改装朽葉色表紙(二四・〇糎×一七・二糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・二二丁(九糎)

匡郭・無辺無界(挿絵匡郭・四周单边(一九・〇糎×一四・〇糎))

印記・「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「明治十三年購求」

備考・題簽がはがれた跡あり。

【刊年・刊行者】

二二ウの刊記は以下の通り。

「明暦四年／仲夏上旬／藤井五兵衛」

本書は明暦四年五月の刊行である。版元は、藤井五兵衛とあるが、明暦元年に『ふうふしゆるん』を出版した京の藤井五兵衛のことと思われる。

【五〇】一もときく 刊年不明 三冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇九八」

『一本菊』は室町時代に成立した御伽草子で、王朝物語の雰囲気強く残した継子物である。『風葉和歌集』に描かれた散逸物語『あだ波』の改作であると考えられている。複雑なストーリーであるにも関わらず構成が整っており、御伽草子の中でも稀な作品であるといえる。また、継子物に多い観音靈驗譚の側面も兼ね備える。

舞台は村上帝の世。皇子・兵部卿宮は菊の宴を催し、主人公・兵衛佐の屋敷にある美しい一本菊を所望した。この菊は、兵衛佐の妹姫が育てたもので、これがきっかけとなって兵部卿宮は妹姫のもとに通うようになる。しかし、兵衛佐兄妹の継母は、これを妬んでいた。継母の実子である四位少将は尊大な人物で皆に憎まれており、五節の夜に闇討に遭った。そこで継母はこれを兵衛佐の仕業だと讒奏。兵衛佐は鬼界島に流され、妹姫は四条辺りの屋敷に幽閉されてしまう。その上、継母は兵衛佐の恋人だった侍従内侍を実子の四位少将の嫁にしようとする。しかし侍従内侍は薩摩に逃れて兵衛佐と無事再会する。そのころ四条の屋敷に幽閉されていた妹

姫は、継母の家の目代に言い寄られて苦しんでいた。そこで乳母が清水観音に詣でて念じると、その利益か、偶然、長谷寺参詣の帰途にあった皇子・兵部卿宮の一行と再会する。姫が四条にいたことを知った兵部卿宮はすぐに姫を助け、自らの妃とした。やがて二人のあいだには若君が生まれ、兵部卿宮は帝に即位した。兵衛佐と恋人の侍従内侍は、帝の計らいで都に召し返され、奸計を巡らした継母とその子供たちは罪せられて都を追放された。帝の覚えめでたく、兵衛佐は三位中将まで昇進し、一族は末永く栄えた。本書の写本には『白ぎくさうし』の名前を持つものもある。また奈良絵本も製作されており、絵と共に親しまれた。

版本としては、万治三年版と、寛文一一年版の二種があり、いずれも挿絵を添えて刊行された。ただし本書に関しては、刊記に刊年の記載のない刊年不明版であり、挿絵は万治三年版をそのまま転用したもの。筆跡に関しては当文庫蔵の貞享四年版（延宝四年版後印）『曾我物語』〔請求番号特〇六七・〇〇〇二〕と同一。したがって本書も延宝年間前後の出版かと想像される。

なお、本書は、三巻三冊で構成されているが、改装した際に表紙を付けた間違えたと思われる、二冊目が下巻、三冊目が中巻になっている。

本書は昌平坂学問所の旧蔵書であり、文久三年に新収された。昌平坂学問所で使用されていた受け入れ印「文久癸亥」の押印でそれと判明する。

【書誌】

外題・「一もときく 上（中・下）」左肩四周双边刷題簽（一七・五糎×四・二糎）

内題・「一もときく」

表紙・改装縹色表紙（二六・〇糎×一七・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一二丁（五図）、②一二丁（六図）、③

一二丁（五図）

匡郭・四周单边（二二・〇糎×一七・〇糎）

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「昌平坂学問所」「文久癸亥」備考・二冊目と三冊目が入れ替っている。②裏表紙のみ灰色表紙。③裏表紙のみ浅葱色表紙。

【刊年・刊行者】

本書は野田庄右衛門版万治三年刊『一本菊』の挿絵部分を転用してはいないものの、いつ出版されたかについては定かではない。刊記には版元名のみ。五・五糎×二・〇糎の四周双边の長方枠に「西村開板」と、ある。西村一統の書肆は京や江戸に多くあるが、本書は江戸の書肆から出版された江戸版と思われる。

【五一】松風むらさめ 万治二年刊 一冊

鹿都部真顔旧蔵〔請求番号二〇四・〇〇七二〕

『松風村雨』は別名『松風村雨由来』『行ひら須磨物がたり』とも称される御伽草子である。主に謡曲『松風』に拠るが、他の御伽草子である『七草草紙』『松竹物語』をそのまま引用した部分もある。一般的には室町時代に成立した御伽草子であるとされるが、その構成から近世初期の成立とみる向きもある。万治・寛文年間には、著名な謡曲を題材とした書き下ろしの新刊書が様々な書肆から出版されており、本書もそのうちのひとつである可能性が高い。

内容は、中納言行平と松風・村雨の悲恋を歌物語にしたもの。宮中の女房・青柳との密通が発覚した中納言行平は須磨へと流される。そこで行平

は、松風・村雨という海女の姉妹と出会う。行平は姉妹と契りを交わすが、まもなく都へと召し返され、その地で没する。遺された姉妹はこれを嘆き、松風は身を投げ、村雨は出家して尼となる。やがて村雨も亡くなると、姉妹はそろってゆかりの松の木のもとに葬られる。

写本では近世中期に書写されたものが天理図書館に二冊所蔵されているのみで、伝存数は極めて少ない。ただし、絵入版本の出版に伴い、奈良絵本は相当数製作されたものと思われる。

最初の版本は万治二年に尾崎七郎右衛門が出版した絵入本である。本書はそれを求版して別の書肆から出版されたものと思われる。三巻一冊。京版。文字が大きく、每半葉一〇行で行間も広い。筆跡は特徴的である。

他に刊年不明のもので、内容をやや省略した二巻二冊の江戸版も存在する。

なお、本書は鹿都部真顔（北川真顔とも）の旧蔵本。蔵書家であったことと知られるが、文政一二年に貧窮のうちに没してその蔵書は散逸した。本書はそのうちのひとつである。のち、本書はやはり蔵書家であった百井為衡の手に渡ったと思われる、本書にはそれぞれの蔵書印が見られる。

【書誌】

外題・「松風むら雨」左肩四周双边刷題簽（二六・五糎×三・五糎）

内題・「松風むらさめ」

表紙・改装朱色表紙（丹表紙）（二四・三糎×一六・七糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・四三丁（一五図）

匡郭・四周单边（一九・〇糎×一五・三糎）

印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」「真顔」（円型

陽刻印）「百井文庫」（長方陽刻印四・三糎×一・二糎）「百井」（正方陰刻印

二・五糎×二・五糎）「好文堂」（四周双边長方陽刻印二・五糎×一・〇糎）

備考・元表紙（灰色卍繫蓮華空押文様）の上に丹表紙をかぶせて修理してある。朱書で訓点の書き入れあり。

【刊年・刊行者】

本書末尾の刊記は以下の通り。

「万治二年乙亥極月吉日 野田弥兵衛板行」

版元名だけ入木で修正してある。野田弥兵衛とは、京の寺町二条下ルに店を構えていた橋屋弥兵衛のこと。合喃堂とも号す。

【五二】はちかづき 寛文六年刊 二冊

内務省旧蔵「請求番号二〇四・〇〇九六」

『鉢かづき』は室町時代に成立したとされる御伽草子のひとつである。写本、版本ともに多く伝存し、享保年間には洪川清右衛門版御伽草子三編のひとつにも採られた。近世を通してもつとも親しまれた御伽草子のひとつであり、現在まで巷間に周知されている数少ないもののひとつ。

昔話「姥皮」を素材として長谷観音の申し子譚に仕立てたもの。

備中守実高は長谷寺に祈願して姫君を授かる。姫君は美しく育つが、一三歳のときに、母の北の方が病に伏し、姫の頭に鉢をかぶせて亡くなってしまふ。鉢は姫の頭から取れず、やがて屋敷にやってきた継母にうとまされて、姫は屋敷を追い出されてしまふ。姫は入水を図るものの、鉢のためには浮かんでしまつて死ぬこともできない。変化のものと誇られて流離の身となる。その矢先、山陰三位中将家の湯殿の火焚きに雇われ、どうにか糊口をしのぐ。山陰家には四人の息子がいて、それぞれに美しい嫁がいるが、末の宰相殿にはまだ妻がいなかった。宰相殿は、湯殿で鉢かづき姫の美し

い手足に心惹かれ、二人はやがて契りを結ぶ。だが、これを知った宰相殿の母は怒り、鉢かづき姫に恥をかかせて屋敷を追い出そうと図り、他の息子たちと嫁比べを用意させる。鉢をかぶった醜い容貌を笑われたくない二人は嘆き、引き裂かれるよりは、と考え、家出を決意する。すると、その途端、姫の頭の鉢がはずれ、美しい容貌が顕わになり、その上、鉢の中から衣装や財宝の数々が出てきた。姫はその衣装のおかげで、嫁比べで兄嫁たちを凌ぎ、勝つことができた。こうして、宰相殿と鉢かづき姫は結ばれ、宰相殿は山陰家の総領となった。その後、宰相殿と長谷寺に参詣した姫は、そこで姫を追い出したことを悔いて修行者となった父の備中守と再会するのだった。

『鉢かづき』は、写本、奈良絵本、版本と様々な形で享受されてきたが、中でも絵入版本は比較的早い段階で出版され、挿絵と共に楽しむものとして考えられた。そのため近世期を通して何度も出版されている。主なものでも、寛永古活字版、万治二年版、寛文六年版、延宝四年版、貞享元年版、元禄一年版、宝永二年版、宝永七年版などが挙げられる。これらは内容は同じであるが、本文や挿絵に違いがあり、およそ二種類に大別することができる。ひとつは、寛永古活字版系統で、もうひとつは、万治二年松会版系統である。

本書は寛文六年版であり、万治二年松会版と同様の本文系統と挿絵を持つ。上下巻二冊で、それぞれに二か所、見開きの挿絵が添えられている。また、毎半葉一六行の密な版面で、料紙は質の悪い漉き返しであることから、江戸版であるとわかる。最も大量に出版されたとされる延宝四年版に比べると、やや珍しい版である。

本書は内務省の旧蔵本で、民間から買い求めたもの。それ以前の旧蔵者の手によるものか、表紙に朱書打付で「自寛文六年至嘉永四年□九十六年」

と書いてある。内務省の蔵書表で一部読めなくなっている。

【書誌】

外題・「新板／はちかつきひめ 上(下)」左肩四周双辺刷題簽(一七・〇
糶×四・〇糶)

内題・「はちかづき」

表紙・改装浅葱色雷文繫龍刷文様表紙(二六・八糶×一八・〇糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①一〇丁(四図)、②一〇丁(四図)

匡郭・四周单边(二一・二糶×一六・八糶)

印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」「大橋」(楕円

型陽刻印一・二糶×〇・八糶)「特価」(楕円型陽刻印一・〇糶×〇・七糶)「□

□」(長方陽刻印三・〇糶×二・二糶)

備考・①表紙に朱書打付の落書。丁付は「上二」から開始。第一丁に三・

九糶×一・八糶の長方形の切り取り跡。旧蔵者の印記を消したのか。

【刊年・刊行者】

刊記は本文末尾、②一〇オに以下の通り。

「寛文六丙午年／二月吉日／山本九左衛門板」

これによれば、版元は江戸大伝馬町三丁目の正本屋・山本九左衛門。暁鶏堂、丸屋、草紙屋とも号し、貞享四年の『江戸鹿乃子』には、浄瑠璃本屋として掲載されている。当時、浄瑠璃正本と御伽草子は近い関係に認識されており、正本屋が御伽草子の出版を兼ねていたといわれている。初期の代表的な書肆で、山本九兵衛の別家か。しかし、上方の山本九右衛門と同一視するむきもあり、未解明の部分も多い。

【五三】はちかづきさいしやうの君 刊年不明 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇九七」

本書も前掲本と同じ御伽草子『鉢かづき』である。『鉢かづき』には別の書名として『はちかづきのそうし』『鉢かすき物語』などがあるが、本書の内題に採られている『はちかづきさいしやうの君』もそのうちのひとつで、内容は前掲本と同系統のものである。両者の共通点として上下巻であることと、それぞれ一〇丁ずつで、見開きの挿絵が二か所ずつ添えられていることなどが挙げられる。挿絵の場面や構図もおおむね共通するが、絵柄はまったく違っている。本文の筆跡も異なっており、絵師も別の人物であると思われる。ただし、刊記に刊年の記載がないため刊年は不明。ただし、万治二年松会版の系統である。

本書の最大の特徴は、挿絵に手彩色が施されていることである。丹緑本風ではあるが、数種類の絵の具が使われており、かなり色彩は鮮やかである。なおその絵柄を見るに、当文庫所蔵の無刊記版『平家物語』（請求番号一六七・〇〇四〇）、貞享四年版（延宝四年版後印）『曾我物語』（請求番号特〇六七・〇〇〇二）と同一の絵師の手によるものと判断される。筆跡もまったくの同一とは言いが、極めてよく似ており、同一の筆工がことなる時期に手掛けたものと推定される。その上、貞享四年版『曾我物語』は同じ版元から出版されているため、手がけた絵師や筆工などの職人たちが同一であった可能性が高い。なおこの『曾我物語』は延宝四年版の後印であるので、したがって本書も延宝年間前後に製作された可能性が高いと考えられる。

なお、本書は昌平坂学問所記録調所の旧蔵。二巻一冊に合冊されている。

【書誌】

外題・「絵入／はちかづきひめ 全」左肩四周双边刷題簽（一六・三糎×三・五糎）

内題・「はちかづきさいしやうの君」

表紙・改装朱色布目型押表紙（丹表紙）（二六・五糎×一八・三糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・二〇丁（八図）

匡郭・四周单边（二一・三糎×一六・八糎）

印記・「昌平坂」「番外書冊」「浅草文庫」「日本政府図書」不明墨印（円型陽刻印直径三・〇糎）

備考・一〇丁目までが上巻。

【刊年・刊行者】

本文末尾二〇オに、四周双边枠（四・九糎×一・二糎）の中に「松会開板」とある。いわゆる松会版。

【五四】堀江物語 寛文七年刊 三冊

曼珠院旧蔵「請求番号二〇四・〇〇七六」

『堀江物語』は室町時代に成立した御伽草子のひとつで、仇討を中核とする武家物である。この系統の御伽草子には決まった型式があり、『明石物語』『村松物語』『師門物語』などと同じ系統であるといえる。浄瑠璃節に通じる詞章を持つのも特徴のひとつである。

下野国の住人・堀江三郎頼純とその妻のあいだに、月若という名の男児が生まれる。だが、頼純の父親が亡くなると堀江家の所領は召し上げられて、堀江家は苦しい生活を強いられることになった。頼純の舅・原新左衛門は娘を堀江家に嫁がせたことを後悔した。その矢先、京から国司として

下野に下ってきた三位中将が、頼純の妻に横恋慕する。これを好機と考えた舅の新左衛門は、京都大番役として上洛する途中の頼純を襲撃。頼純を自刃に追い込み、未亡人となった娘を三位中将に嫁がせようとする。しかし、夫の死を知った娘は、頼純のあとを追って自害してしまう。一人遺された息子の月若も池に沈められてしまう。しかし、乳母がこれを探していると、感じ入った靈蛇が月若を助けた。そののち月若は、子供のいない奥州の岩瀬権頭に養子として引き取られ、わが子のように育てられる。そして元服をむかえ、岩瀬小太郎いへむらと名乗るようになる。いへむらは、両親を死に追いやった、新左衛門と三位中将への復讐を誓う。そして上野へと討ち入り、ついに新左衛門を出家に追い込む。そして続けて上洛し、三位中将を討ち滅ぼした。帝はこのことに叡感あつて、いへむらに所領三國を与え、兵衛佐に任じた。

伝存する写本は、元和四年奥書の近時写本、MOA美術館所蔵の絵巻などに限られ、極めて数が少ないといえる。特に後者は岩佐又兵衛の手によるものといわれており、貴重な資料であるといえる。版本も寛文七年に出版されたものしかなく、本書はこれに当たる。

三卷三冊。京版。明治一二年に内務省が購入したもの。ただし、京都曼珠院の釣鐘型の蔵書印が見られることから、本書は曼珠院の旧蔵書であることがわかる。

上巻の丁付は「二」から始まり、中巻には「六七」、下巻には「十二十三」という丁付がある。これはおそらく、三冊の丁数を揃え、すべて最終丁の丁付を「十四」に揃えようとしたもの。

【書誌】

外題・「堀江物語」左肩四周双辺刷題簽（二六・〇糶×三・四糶）

内題・「堀江物語」

表紙・改装栗皮表紙（二六・〇糶×一七・五糶）
 墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一三丁（四図）、②一四丁（三図）、③一四丁（三図）
 匡郭・四周単辺（二一・〇糶×一五・三糶）
 印記・「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」「明治十二年購求」「曼珠院図書之印」（釣鐘型陽刻印）
 備考・各冊飛び丁が見られる。

【刊年・刊行者】

本書第三冊目の末尾に、刊記は次のようにある。

「寛文七年丁未十一月吉日／野田弥兵衛板行」

野田弥兵衛とは、京の寺町二条下ルに店を構えていた橋屋弥兵衛のこと。合哺堂とも号す。

【五五】「窓の教」 写年不明 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇八二二

『窓の教』は室町時代に成立した御伽草子であるが、近世期に至って出版されることはなく、写本でのみ伝えられてきたものである。本書の他には『伏見の中將』の題を持つ宮内庁書陵部所蔵本のみが確認されているだけである。

本書は写本で、手彩色の挿絵が添えられている。絵の数は本文部分に比較してとても多く、また絵の中には人物の傍らに台詞風の詞書が書きこまれている。また挿絵が数頁に渡って連続する箇所があるため、もとは絵巻であったものを写したのではないかと思われる。山東京伝の『骨董集』に

は、「文明以前、火燵なき時代、火鉢にて足をあたたむる体なり。窓のをしへといふ、ふるき絵巻に載たり」という一文があり、やはりかつて『窓の教』という名の絵巻があったことがわかる。

本書の題簽は「窓の友」となっているが、右の理由により、目録題には原書となった絵巻の題である『窓の教』という書名が採られた。

本文部分は毎半葉一〇行で、字高二〇・〇糎に挿えられている。料紙は楮紙であり良質とはいえないが、文字や絵は美麗である。

梗概は以下の通り。

伏見三位中将という人は、詩歌管弦に秀でた貴公子で帝の覚えもめでたい人であったが、いまだ妻を持っていなかったため、しかるべき女を探すことにした。毎月、一人の女性の元に通い、一二月で二人の女に出会うたが、なかなか良い相手が見つからない。嫉妬深い女、あさましい女、無作法な女、仏教に熱中しすぎている女など、様々な女性の姿を見て落胆した中将は、出家遁世を決意する。しかし、帝の計らいで、中将は女四の宮を妻に迎え、閑白となって一族は栄えた。

中将の恋愛遍歴を描くなど、内容の多くが『伊勢物語』や『源氏物語』などの古典に着想を得たものであるが、抒情性や人物の内面に踏み込むことはなく、あくまでも女性のいたらかなさや滑稽さを描くパロディ的な内容となっている。これは、本書が、古典の教養深い人物の手によって書かれた遊び心の溢れる作品であると同時に、当時、女性の教訓書としても読まれていた古典に対する風刺でもあった。裏返せば本書はしたがって、女子の教訓書としての性格も色濃く残しているともいえる。

なお、本書は、和学講談所の旧蔵書。『室町時代物語大成』巻一二に所収されている『窓の教』の底本である。

【書誌】

外題・「窓の友」左肩墨書題簽（一七・八糎×三・六糎）

表紙・改装香色布目型押表紙（二七・〇糎×一九・三糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・四一丁（三七図）

匡郭・無辺無界、字高二〇・〇糎

印記・和学講談所「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」備考・本書に内題はなく、題簽の外題は「窓の友」だが、統一書名の『窓の教』が目録書名として採用された。

【写年・書写者】

奥書がないため、不明。書写されたのは近世後期か。

【五六】うすゆき物語 延宝八年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇六八」

『薄雪物語』は、慶長一九年にはすでに成立していたとされる物語で、仮名草子に分類されるものである。作者未詳。それ以前の室町時代物語の趣を残しつつも、艶書文範としての実用書としての性格を併せ持つ。

梗概は以下の通りである。

主人公の園部の衛門は清水参詣の途中、美しい人妻・薄雪を見初める。艶書を送り続けようやく二人は契りを結ぶが、それもつかの間、衛門の留守中に、薄雪は病を得て亡くなってしまふ。世をはかなんだ衛門は出家し、二六歳の若さで往生を遂げる。

本書で最も特徴的な点は、いわば書簡体小説の形をとっている点である。本書の内容の大半は物語の展開ではなく、衛門と薄雪のやりとりする艶書の内容である。『伊勢物語』『平家物語』などから説話を引用、さらに『古

今和歌集』などから古歌を多く引用しており、情熱的に言い寄ってくる衛門を、薄雪が「貞節を守る」ことを主張してつれなく断り続ける。これらの内容はいわば、艶書の文例集として当時の読者に受け入れられた。さらには、貞女・薄雪を模範として、女性の教養書としても歓迎された。これらの理由もあり、『薄雪物語』は、大量に出版されて近世期を通して幾度も再版された。しかし、衛門の出家通世譚には、恋のはかなさやあわれさが表現されており、室町時代物語や中世擬古物語の風情を残している。作者は定かではないが、艶書の文例集に仕立てることが当初の目的ではなかったと想像される。

主な版本としては、寛永初期古活字版、寛永九年版、寛文四年版、寛文五年版、寛文六年版、寛文九年版、延宝六年版、延宝八年版、貞享二年版、元禄四年版、元禄年間版、正徳五年版、元文五年版、寛政一三年版、弘化元年版などを挙げることができるが、他にも無刊記版や後刷本が多く現存しており、すべて挙げることは難しい。

本書はこのうち延宝八年に刊行された万屋庄兵衛版の後刷と思われる、刊記の版元名を削ったもの。ただし、この万屋庄兵衛版は、延宝六年版秋田屋五郎兵衛版を原板とする。挿絵や本文も同一である。二巻二冊の江戸板である。上方板と江戸板を比較すると、本書の場合、江戸板には挿絵や内容を一部省略しているという特徴が見られ、本書もその例の一つである。外題尾題の下には「武藤氏書写之／西察」とある。これは上方板の流用であるが、筆跡は武藤西察のもの。武藤西察は、多く仮名草子の書写を手掛けており、他にも『百八町記』などの作品を挙げることができる。

なお、本書は、昌平坂学問所の旧蔵書である。「文久癸亥」の印記がある点から見て、文久三年に、昌平坂学問所に新収されたと思われる。

【書誌】

外題・「新板／うすゆき物語 上(下)」左肩黄色料紙四周双辺刷題簽
(一五・四糎×三・四糎)

内題・「うすゆき物語」

表紙・改装浅葱色表紙(二二・三糎×一六・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二一丁(四図)、②二二丁(四図)

匡郭・四周単辺(一九・六糎×一四・八糎)

印記・「大学蔵書」「浅草文庫」「日本政府図書」「昌平坂学問所」「文久癸亥」備考・版木の磨滅が見られ、後刷でも後半の刷りか、あるいは覆刻と思われる。

【刊年・刊行者】

②一三才に刊記が以下の通りある。

「延宝八庚申歴弥生」

延宝八年版は元来、万屋庄兵衛から出版されたが、本書の場合はこの版元名の部分が削られている。

なお万屋庄兵衛は、江戸の書肆で、延宝四年版『鉢かづき』の版元である。さらに本書の原板の延宝六年版を出版した秋田屋五郎兵衛は、京都寺町通誓願寺下ルに店を構えていた上方の書肆。

【五七】あた物かたり 寛永一七年刊 二冊

和学講談所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇九九」

『あだ物語』は、三浦為春作の仮名草子である。鳥たちを擬人化して恋物語とする内容は、中世御伽草子の異類物に通じるものがあるが、本作の場合、和漢の故事を多く引用して仏教的な教訓書として製作された。いわ

ば婦女子を対象とした物語仕立ての道徳書である。こうした側面から、御伽草子と仮名草子の過渡期的作品としてみなされるものである。

作者の三浦為春は、相模国三浦領主・三浦義同の子孫で、慶長三年に徳川家康のもとに出仕して三千石を受けた大名である。このとき、三浦姓を許され、三浦長門守と称した。妹のお方の方は家康の夫人で、紀伊大納言徳川頼宣と水戸中納言徳川頼房の生母である。大坂夏の陣に出陣ののち、紀州藩五家の一となり、寛永元年に致仕。和歌・連歌・俳諧を嗜み、隠居後は文人として名を馳せた。この頃に著述して後水尾院の上覧にあずかったとされるのが、『あだ物語』である。為春の絵入自筆本二帖は、現在も国立国会図書館に所蔵されている。為春自身の跋文のほかに、大覚寺随庵と烏丸光広の跋文（寛永一三年）が付されている。

こうして公家や文人たちのあいだで話題となった『あだ物語』は、寛永一七年に京都の書肆から絵入製版の二冊本として出版された。本書はこのときの刊本に相当する。絵入自筆本では跋文となっていた為春自身の文章が、本書では序文に変更され、書名の下に「平為春」と作者の署名が入られた。これは仮名草子の作品においては極めて珍しい例である。本文部分に匡郭はない。字の高さは二・二・二。挿絵には匡郭があるが、これが頁をまたいで添えられていたり、本文部分と挿絵が絵と同じ面にいれられるなど、写本の体裁のなごりが見られる。出版黎明期の寛永年間の特徴といえる。

なお、本書の内容は以下の通り。

美人と評判の鶯の照うそ姫のもとには、様々な鳥たちから多くの歌が届く。しかし、照うそ姫はなびかない。そのうち照うそ姫は重い病に伏し、梟の修験者ふくろ法師が祈禱することになった。すると見事、照うそ姫は回復したが、しかし、今度はふくろ法師が照うそ姫に恋をして重い病に伏

してしまった。照うそ姫は、ふくろ法師から再三届く艶書に返事をしなかったが、みみずくが仲介に入り、姫はようやくみみずくにふくろ法師への返事を託した。しかし、みみずくはこの手紙をふくろ法師に届ける前に紛失してしまふ。それが鷹の一族に拾われ、ふくろ法師の恋慕が明るみになり、鷹はふくろ法師を弾劾して、なおかつ照うそ姫を自分のほうになびかそうとする。こうして鳥たちの争いが始まり、照うそ姫は嘆いて自害してしまふ。鳥たちの争いに蝙蝠が仲介に入ったことで鳥たちは争いをやめるが、照うそ姫の死を知り、無常を感じた。そして鳥たちは、姫の菩提を弔って往生を遂げた。

内容は御伽草子『ふくろふ』を元としているが、ここに故事や説話、仏教的な教訓が多く入れ込まれており、婦女子に対してわかりやすく、どのように振舞い、どのように仏道修行をするかということを示している。

なお、本書は和学講談所の旧蔵書である。

【書誌】

外題・「あだ物語 上(下)」左肩四周双边刷題簽(一六・〇糎×三・四糎)
内題・「あだ物かたり」

表紙・改装朱色麻葉繫地藤丸型押文様表紙(二六・五糎×一九・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①五二丁(九図)、②六一丁(一一図)

匡郭・無辺無界、ただし挿絵匡郭・四周单边(二〇・五糎×一六・三糎)

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書

備考・挿絵に匡郭はあるが、匡郭の枠外にも印刷がある。①一オ〜二ウ

まで序、以降本文。

【刊年・刊行者】

②六一ウに以下の通り刊記が記載されている。

「寛永拾七庚辰年二月吉辰／御池通俵屋町／松や六兵衛開板」

松屋六兵衛は、御池通俵屋町猪熊西入に店を構えていた京都の書肆である。本書以外の出版の記録はなく、詳細は不明。黎明期の書肆である。なお、同年の後印本で、中村五兵衛版もある。

【五八】大坂物語 刊年不明 二冊

内務省旧蔵「請求番号一七一・〇〇四二

『大坂物語』は慶長年間に成立した、大坂冬の陣・夏の陣の顛末を描いた軍記物であるが、その成立過程に大きな特色がある。『大坂物語』は上下巻二冊で、それぞれ大阪冬の陣、夏の陣で構成されているが、冬の陣の終結直後に上巻が出版され、夏の陣の直後に下巻が出版された。つまり、合戦の同時代に、即時性をもって出版されたのである。年次がはっきりしている写本(天理図書館所蔵)には慶長二〇年の奥書がある点からみても、合戦から時を経ずして成立しているのは明らかである。

作者は未詳。物語の末尾で徳川家康の長寿を祝していることから、関東の人物で徳川方であったことが想像されるが、本文の内容では必要以上に徳川家に肩入れすることはなく、両軍の武将について第三者的視点での著述をしている。こうした点から中村幸彦氏は『大坂物語』について「出版のジャーナリズム性を日本で最初に示した書物であった」と評している。おそらく、合戦の速報を大衆に伝える目的での出版であったのだろうと思われる。

上巻は冬の陣についてを描く。巻頭にはまず関ヶ原の合戦の概要を示す。慶長一九年、徳川方との関係が悪化した豊臣方は籠城の準備をする。そしてやがて合戦が始まるが持久戦となった。秀頼は決戦を主張するが、城内

は和睦に傾き、家康も和議を申し入れて合戦は休止される。

下巻では夏の陣についてが描かれる。再び両軍は緊張関係となり、淀殿や老臣たちは秀頼に降伏をすすめるが、秀頼はこれを拒否する。そして合戦は再開されるが、豊臣方は圧倒的不利の状況下に追い詰められ、ついに淀殿・秀頼母子は大坂城内で自害する。そして、秀頼の遺児も処刑されて、とうとう豊臣家は滅亡する。家康の長寿と国家安寧を願う一文で物語は終わる。

本書は早くは古活字版で出版されたが、整版本は幕末に至るまで繰り返して出版された。主なものだけでも、寛永版、正保三年版、慶安二年版、慶安三年版、承応版、明暦四年版、寛文八年版、寛文十一年版、寛文十二年版、元禄七年版、貞享二年、正徳三年版、享保三年版、享保七年版、享保八年版、寛政一二年版などを挙げることができるが、後刷本や覆刻を含めると、膨大な数に上る。

これら整版本の特徴は、本文の異同が少ない点と、首帳を付載している点である。また、時代が下るごとに、豊臣方の劣勢を強調する挿絵が増えていく。これらは世情の推移を示している。しかし、概ね同一場面を挿絵にし、構図も先行の版を参考にしていると見られ、大きくかけ離れたものは少ないことを指摘できる。

本書に関しては刊記に刊年の記載がないため、出版時期は不明である。上下巻二冊、下巻一八丁目から首帳付載。挿絵は師宣風で、每半葉一四行。料紙は質の悪いもので、江戸板としての特徴がみられる。おそらく寛文八年松会版の刊年部分を削除した版であると思われる。

なお、本書は内務省の旧蔵書である。

【書誌】

外題・「絵入／新板大坂物語 上／首帳入(下)」左肩四周双辺刷題簽

(一七・〇糎×三・五糎)

内題・「大坂物語」

表紙・改装紺色卍字繫型押表紙(二七・〇糎×一八・八糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二二丁(七図)、②

匡郭・四周单边(二二・二糎×一六・〇糎)

印記・「大日本帝国図書印」「太政官文庫」「日本政府図書」

備考・①裏表紙に墨書落書あり。②二二ウに落書「加藤安芸守」あり。

②一八丁目以降「首帳」

【刊年・刊行者】

②一七才、四周单边の長方枠(五・五糎×二・〇糎)内に「松会開板」とある。

【五九】大坂物語 享保七年刊 二冊

浅草文庫旧蔵「請求番号一七一・〇〇四一」

本書は享保七年に出版された仮名草子『大坂物語』である。上下巻二冊。江戸板。

本書は前掲書の同版である。ただし②一七才にあった「松会開板」の刊記は削られており、その代わりに、下巻の最後である②二三丁才に新たな刊記が挿しこまれた。他と比べると、この二三丁目の匡郭の大きさが異なることから、新たに版木に彫り、刷りなおして一丁追加したと考えるべきだろう。

料紙は前掲書よりやや良質ではあるが、版木の磨滅が著しく、版を重ねたことが想像される。

【書誌】

外題・「平かな／絵入／大坂物語／首帳入」左肩四周单边刷題簽(一九・〇糎×三・八糎)

内題・「大坂物語」

表紙・改装縹色表紙(二五・二糎×一七・八糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二二丁(七図)、②二三丁(八図)

匡郭・四周单边(二二・〇糎×一六・〇糎)、②二三才刊記は四周单边

(二二・五糎×一五・七糎)

印記・「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・前掲書と同版。②題簽下半分破れあり。

【刊年・刊行者】

②二三才の刊記は以下の通り。

「享保七壬寅歳八月吉日／日本橋南一丁目／杵浦三郎兵衛板」

版元の杉浦三郎兵衛は日本橋南一丁目に店を構えていた江戸の書肆である。この翌年には跡部良顕の『玉銚の道草』を出版している。主に享保年間を中心に活動したものと思われる。本書の版木は元来松会板であるので、のち求板して本書を出版するに至ったと想像される。

【六〇】大坂物語 寛文八年刊 二冊

内務省地理局旧蔵「請求番号一七一・〇〇四三」

本書も前掲二書と同系統の整版本『大坂物語』であるが、本書は刊年が明らかで寛文八年に出版されたもの。毎半葉一四行の密な版面と、料紙の質がやや劣る点など、江戸板の特徴を有している。

本書は内務省地理局の旧蔵書。明治五年に政府は「皇国地誌」編集を目的として、正院内史所管のもとに、歴史課と地理課を併設した。この地理課はその後、幾度か組織改編によって名称が変更されたが、明治一〇年に内務省地理局となった。本書に押印されている「地誌備用図籍之記」は、この頃に地理局で使用されていた官印で、明治一八年刊本「類聚三代格」に押されているのが最後である。したがって、本書は、大阪の地誌作成のために明治一〇年から一八年のあいだに地理局の所蔵となったことがわかる。

【書誌】

外題・①「新板／大坂物語 上」左肩無地料紙題簽に墨書（一七・五糎×三・四糎）、②「新板／大坂物語 并首帳 下」左肩四周双边刷題簽（一七・二糎×三・二糎）

内題・「大坂物語」

表紙・改装紺色表紙（二六・八糎×一八・七糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二五丁（九図）、②三三丁（七図）

匡郭・四周单边（二二・三糎×一六・四糎）

印記・「日本政府図書」「地誌備用図籍之記」

備考・②一九ウから「首帳」、刊記は「首帳」末尾。

【刊年・刊行者】

②二三オ「首帳」の末尾に刊記あり。

「寛文八年／申ノ六月吉日／本通油町／問屋板」

版元はおそらく、当時、江戸通油町に店を構えていた鶴屋喜右衛門であると思われる。「本問屋」とも号し、刊記の記載にもそうした例が多い。ただし、本書の場合、「通油町／本問屋板」となるべきところが、「本通油町／問屋板」となっている。「本」の文字だけ別筆にも見えるので、刻工

があとから入れ木を間違えたか、筆工の誤りである可能性が高い。

【六一】大坂物語 寛文二二年刊／享保七年刊 二冊

修史館旧蔵「請求番号一七一・〇〇四〇」

本書も前掲書と同系統の整版本『大坂物語』であるが、本書は上巻と下巻を異なる版本で組み合わせたいわゆる取り交ぜ本である。下巻には、刊記がそのまま残っており、これは前掲の享保七年版『大坂物語』（「請求番号一七一・〇〇四一」と同板であることがわかる。刷りの状態などは、本書のほうがやや良好。上巻は、刊記部分がないため、推測の域を出ないが、每半葉一二行で、比較的良質な料紙を用いている点から京版と見られる。

なお、本書は修史館の旧蔵書。修史館は、明治政府が修史事業のために設立したものであり、明治五年に設置された太政官正院の歴史課がその前身である。幾度かの改編を経たあと、明治一一年に修史館に改称。そのころに新収された史料に、本書に押印されている「修史館図書印」が押された。なお、本書の場合、この印が上下巻ともに押印されているので、修史館に新収されたときにはすでに、上下巻に組み合わされていたとみられる。なお上巻のみに押印されている印記は、「伊太」（長方陽刻墨印一・五糎×一・〇糎）と、「大橋」（楕円型陽刻印一・三糎×〇・八糎）の二種。貸本屋のものと思われる。下巻のみに押印されている印記は、「橋左蔵」（楕円型陽刻墨印四・三糎×二・二糎）の一種であり、元来は上下巻がそれぞれ別の場所に所蔵されていたことがわかる。

【書誌】

外題・「大坂物語 上（下）」左肩四周双边刷題簽に墨書（一八・三糎×三・

○糶)

内題・「大坂物語」

表紙・改装横丁地引表紙(二五・四糶×一七・六糶)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①三九丁(二三図)、②三三丁(八図)

匡郭・①四周双边(二〇・六糶×一六・〇糶)、②四周单边(二二・〇糶×

一六・〇糶)、③二三才刊記は四周单边(二二・五糶×一五・七糶)

印記・「修学館図書之印」「日本政府図書」「伊太」(長方陽刻墨印一・五

糶×一・〇糶)「大橋」(楕円型陽刻印一・三糶×〇・八糶)「橋左蔵」(楕円型

陽刻墨印四・三糶×二・二糶)

備考・①飛び丁あり。

【刊年・刊行者】

②二三才の刊記は以下の通り。

「享保七壬寅歳八月吉日／日本橋南一町目／秋浦三郎兵衛板」

と、あるので、前掲の享保七年版『大坂物語』(「請求番号一七一・

〇〇四一」と同板と思われる。ただし、上巻には刊記がないため、上巻の出版時期は不明。

【六二】聚楽物語 刊年不明 四冊

旧蔵者不明「請求番号二〇四・〇二二九」

本書は別名『関白物語』『関白聚楽物語』とされる仮名草子である。本来は三巻三冊であるが、本書の場合三巻四冊。作者は不明である。

内容は、関白・豊臣秀次一族の滅亡を描いたもの。秀吉が関白職を秀次に譲ったところ、淀殿が若君(のちの秀頼)を出産。自身の地位に不安を

感じた秀次は乱行を繰り返し、とうとう高野山に送られて文禄四年に切腹。遣された家臣たちも各地で相次ぎ自害し、妻妾たちは捕縛され四〇人あまりが三条河原で処刑された。

本書の記述に関しては、信憑性を疑わざるをえない箇所も多く、充分に脚色されたものだと考えられる。ただし、秀次一族滅亡のおおよその課程や出来事は基本的に史実に沿ったもの。軍談系の仮名草子であると指摘することができ。

成立年代も定かではないが、秀次の母の死去の記事があることから、その没年である寛永二年以降の成立であると考えられている。成立後ほどなく出版されたとみえ、寛永年間にはすでに古活字版が製作され、寛永一七年には整版が出版されている。その他、明暦二年整版本などがあるが、本書に関しては刊年の記載がないため出版時期は不明。

ただし、本書の挿絵を見る限り、貞享二年刊『保元物語』『平治物語』『請求番号二一〇・〇一六九』『請求番号一六七・〇〇三〇』、貞享四年刊『我物語』(延宝四年版の入木修正版「請求番号特〇六七・〇〇四八」など)と同一の筆致に見え、同じ絵師の手によるものの可能性が高い。これらの匡郭はすべておおよそ同じ大きさで、毎半葉一五行(一七行という密な版式)においても共通する。(本書は毎半葉一六行。)これらを踏まえると寛文・延宝(貞享・元禄ころのあいだ)の出版とみるのが妥当であろう。

本書に用いられているのは漉き返しの浅草紙と見られ、江戸板。変色が見られる。なお、③九ウに朱書の付箋が貼られている。

「□下文木村ノ女脱走シ三條磧ニ／誅セラル、コトヲ叙ス文長ヲ以テ省ク／故関白へ□□□(判別不能)」

旧蔵者による註と思われる。本書の旧蔵者は定かではない。本書には二種の「秘閣図書之章」という蔵書印があるが、これは明治六年以降にまず

長方印の乙種が押印され、しかしこれが判読しにくいために明治一二年に正方印の丙種が改めて押印され、二種の印が並ぶことになった。この秘閣印を押してあるものはおおむね紅葉山文庫旧蔵本であるが、維新後の新収資料にも押印された例があるため一概には言いきれない。およそ紅葉山文庫旧蔵本は状態がよいいため、やや焼けや破れなどが見られる本書は明治政府によって新収されたものの可能性が高い。

【書誌】

外題・「閑白物語 一名聚楽物語」左肩四周双辺刷題簽に墨書（一八・五糎×三・二糎）

内題・「聚楽物語」

表紙・改装香色表紙（二七・〇糎×一八・三糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一七丁（七図）、②一一丁（六図）、③一二丁（六図）、④一四丁（五図）

匡郭・四周単辺（二二・〇糎×一六・五糎）

印記・「秘閣図書之章」（乙種と丙種）「日本政府図書」（蔵書表）

備考・③九ウ朱書付箋あり。

【刊年・刊行者】

刊年の記載はなく、版式から寛文〜元禄までのあいだを想定するのみ。ただし、④一四オの本文末尾に「山本九左衛門板」とある。山本九左衛門は江戸大伝馬町三丁目北側中程に店を構えていた初期の代表的な書肆で、号は暁鶏堂、正本屋、丸屋、草紙屋など。貞享四年版『江戸鹿乃子』に浄瑠璃本屋と載る。この点から見ても、本書はやはり貞享年間前後の刊行とみてよいと思われる。

【六三】むさしあふみ 万治四年刊 一冊

和学講談所旧蔵「請求番号一六六・〇四二」

『むさしあふみ』は、浅井了意の手による仮名草子であるが、ドキュメントリー性も強く、江戸を襲った明暦の大火についての貴重な資料としての価値も併せ持つ。見聞記としての体裁をとり、家族を大火で失った楽齋坊なる人物が、北野天神で狛物売りに大火の一部始終を語って聞かせる形式となっている。上巻では、明暦三年正月一八日、本郷本妙寺から出火した火が江戸のいたるところに燃え広がっていく有様と、牢屋奉行・石出帯刀が牢から罪人を解放して命を救った逸話などを語る。下巻では、一旦は鎮火したはずの火が、翌一九日に再び出火してついに江戸城まで迫る様子を語る。そして火は二〇日によりやく収まり、死者供養のために回向院が建立されたこと、そして、江戸の街が復興していく様子が語られて、天変地異の歴史について述べたところで終わる。

当時の正確な資料に基づいて書かれたと思われ、火災の被害状況を的確に述べている。しかし、その悲惨な記述のなかにもいくつか滑稽な逸話が挟み込まれ、あくまでも通俗的な読み物としての性格を保持している。

作者・浅井了意は、上方の人で、多くの仮名草子や仏書を手掛けた人物である。従来の研究では、啓蒙的な意味で仏書や因果縁起物を書き、生活のために仮名草子を書き始めたとされていたが、近年の研究では、仮名草子や奈良絵本・絵巻の書写者から身を立てたことが判明しており、長らく様々な文学作品に関わったことで作家として活動するようになったと思われる。初期の仮名草子の代表的な作家である。

初版は万治四年に京の書肆・河野道清から出版された。本書はその同じ年に中村五兵衛から出版された。二巻二冊であったものを、合冊して一冊

に仕立て直してある。他にも同じ年の刊記を持つ後印本で、村上八兵衛版がある。ただし、万治四年の刊記を持つもので最も流布したのが本書である。大火のあった翌年に再版が刊行されていることから、本書は火災に対する対処法の教科書としての需要が多くあったと思われる。

本文部分に匡郭はなく、字の高さは二〇・五糎。ただし、挿絵匡郭は、四周双辺で二〇・三糎×一五・四糎。人物や建物を細かく描き、俯瞰で江戸の火事の様子を全体像を表そうとしている点に特徴のある挿絵である。当時の奈良絵本を思わせる稚拙な筆致ではありながら、火事を逃れた大勢の人物が隅田川に殺到する場面では、数百人に及ぶ人間たちを細密に描いている。

なお、本書は和学講談所の旧蔵本である。

【書誌】

外題・「むさしあふみ 上(下)」左肩無地料紙刷題簽(※上巻題簽上半分破れあり)

内題・「むさしあふみ」

表紙・改装紺色表紙(二五・七糎×一八・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・四六丁(二八図)

匡郭・無辺無界、挿絵匡郭・四周双辺(二〇・三糎×一五・四糎)

印記・「和学講談所」「書籍館印」「浅草文庫」「日本政府図書」

備考・又丁あり。

【刊年・刊行者】

刊記は以下のようにある。

「万治四年丑三月吉日／寺町二条下ル町／中村五兵衛開板」

中村五兵衛は、京寺町二条下ル町に店を構えていた書肆であり、桐花堂と号した。寛永頃から出版業を手掛け始めた近世初期から前期の書肆であ

る。その出版状況をみると、日蓮宗の仏書が多い。

【六四】むさしあふみ 万治四年刊 二冊

内務省地理局旧蔵「請求番号一六六・〇四八一」

本書は前掲書の同版本である。ただし、前掲書と異なって合冊されてはおらず、二巻二冊となっている。前掲書と比較すると、やや版木に磨滅が見られるため、前掲書よりは後の刷りであると考えられる。料紙の質もやや劣る。

題簽下部と、各冊一丁目に不明墨印「本久」(円型墨印一・六糎)の押印がある。貸本屋のものか。また、一冊目の表紙左下に墨書打付の落書「棚橋於」とある。

本書は内務省地理局の旧蔵書である。明治五年に政府は「皇国地誌」編集を目的として、太政官正院所管のもとに、歴史課と地理課を併設した。この地理課はその後、幾度か組織改編によって名称が変更されたが、明治一〇年に内務省地理局となった。本書に押印されている「地誌備用図籍之記」は、この頃に地理局で使用されていた官印で、明治一八年刊本「類聚三代格」に押されているのが最後である。したがって、本書は、明治一〇年から一八年のあいだに地理局の所蔵となったことがわかる。江戸(東京)の地誌作成のため、明暦の大火の資料として新収されたと想像される。

【書誌】

外題・「むさしあふみ 上(下)」左肩四周双辺刷題簽(一六・二糎×三・四糎)

内題・「むさしあふみ」

表紙・改装紺色表紙（二五・五糎×一八・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・四六丁（二八図）

匡郭・無辺無界、挿絵匡郭・四周双辺（二〇・三糎×一五・四糎）

印記・「地誌備用図籍之記」「日本政府図書」「本久」（円型墨印一・六糎）

備考・前掲書と同版。落書あり。

【刊年・刊行者】

刊記は以下のようにあり、前掲書と同板であることがわかる。

「万治四年丑三月吉日／寺町二条下ル町／中村五兵衛開板」

【六五】安倍晴明記 刊年不明 一冊

青山堂枇杷磨旧蔵「請求番号二〇四・〇一〇八」

『安倍晴明記』は浅井了意の手による仮名草子のひとつである。別名では『安倍晴明物語』ともいう。平安時代の陰陽師・安倍晴明の伝説をまとめた一代記的な読み物であるが、安倍仲麻呂の入唐説話など様々な逸話も付されて「金烏玉兔集」の招来を縦軸にした伝奇ものといっている内容を持つ。さらに、この本編三巻に加え、占いに関する「天文之巻」「日取之巻」「人相之巻」などを加え、本来は七巻六冊で寛文二年に出版された。ただし、本書の場合は、「人相之巻」を欠き、残る五冊が合冊されて五巻一冊となっている。刊年は不明。万治二年刊『三井寺物語』、刊年不明版『葛城物語』に続く三部作のひとつと推定されている。

安倍仲麻呂は賢才の誉れ高く、遣唐使として入唐するが、帰国叶わず客死する。霊鬼となった仲麻呂は、続いて入唐した吉備真備を様々に助ける。玄東との囲碁、灯台鬼、野馬台詩の解説など、物語は吉備真備入唐伝説を

追う。そして、やがて時が経ち、安倍氏の末裔として安倍晴明が誕生する。彼の母親は狐で、正体を見破られたがために、幼い晴明を残して姿を消した。そのため晴明は、幼いころから様々な不思議な能力を表す。竜宮で鳥の言葉解する薬を得て、鳥のさえずりから天皇御悩を知り、見事平癒させて陰陽師となる。そして、蘆屋道満との知恵比べを行い、これに勝利する。晴明は主計頭となり勅命によってついに入唐することとなる。そして城荆山の伯道上人から陰陽の深秘を授かって帰朝する。しかし、晴明は、妻の梨花と道満の裏切りによって殺害されてしまう。だが、伯道上人の霊力によって蘇生し、道満を討つて天文博士に復帰する。

信田狐など、中世からあった安倍晴明にまつわる伝説を時系列順に並べたものといえるが、独自の逸話も載る。これらは後世の安倍晴明のイメージに大きな影響を残し、古浄瑠璃『しのだづま』を成立させ、さらに後年の『芦屋道満大内鑑』の原型となった。また、安倍仲麻呂入唐説話が独立して、宝暦年間には『安倍仲麻呂入唐記』が出版されている。この内容には、直接の引用関係を見とることができる。

本書で最大の特徴は、第一丁目に、大田南畝自筆の識語が挿入されている点である。殷の紂王と、周の武王の故事を引き、占い（陰陽道）の重要性について述べている。ここには、「辛未南甫蜀山壮先人」との署名がある。文化八年のことと思われる。なお、本書は、狂歌師・青山堂枇杷磨の旧蔵書である。小石川の書肆・雁金屋の生まれであった青山堂は狂歌を通じて大田南畝と親交が深かった。おそらくこの識語は、青山堂の依頼で南畝が記したものと思われる。料紙は本文のものと異なっており、改装の際に付け加えたと思われる。この段階で合冊されたか。見返しに、卷子本型の蔵書印「青山居士千巻文庫」が押し印されている。このうち、本書は昌平坂学問所記録調所の所蔵となったと思われる。ただし、各巻の巻頭に不明印記（正

方陽刻印一・八糎）があり、この印が改装前のものと想像され、本書の中でもっとも古い印記とみられる。

刊記に刊年を欠くため、正確な刊年は不明だが、寛文二年版の後刷と思われる。挿絵は、「天文之巻」「日取之巻」にはなく、本編部分のみに添えられる。落書が多く見られ、文字の書き込みのみならず、彩色されている箇所も多い。行数は、毎半葉一行であり、上方版と思われる。

砥粉色の帙入り。左肩無地料紙に墨書の題簽「安倍晴明記」。

【書誌】

外題・「安倍晴明記」左肩墨書打付

内題・「安倍晴明記」

表紙・改装朱色蜀江錦地蓑亀空押文様表紙（二四・五糎×一六・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・九七丁（二七図）

匡郭・四周単辺（二一・〇糎×一五・五糎）

印記・「昌平坂」「番外書冊」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「青山居士千卷文庫」および不明印記（正方陽刻印一・八糎）

山居士千卷文庫」および不明印記（正方陽刻印一・八糎）

備考・二二丁目まで巻一、四八丁目まで巻二、六七丁目まで巻三、八〇丁目まで「天文之巻」、九七丁目まで「日取之巻」。版心は、「天文之巻」に

は「巻四」、「日取之巻」には、「巻五」とある。

【刊年・刊行者】

刊記はなく、「日取之巻」の尾題の手前に次のようにある。

「毛／馬／八郎右衛門板」（九七ウ）

上部が黒く塗りつぶされており、判然としない。

しかし、これは、大坂の書肆・毛馬屋八郎右衛門のことであると思われる。大坂上本町三丁目に店を構えていた。ただし、延享二年版の場合、「人相之巻」の末尾に刊記が載るので、本書は出版時から「人相之巻」を欠い

ていたか。

【六六】二人びくに 寛文四年刊 二冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇七五」

『二人比丘尼』は鈴木正三の手による仮名草子で、寛永九年頃に成立したと考えられている。仏教唱導を目的として製作された出家発心譚で、別名に『須田弥兵衛妻出家絵詞』『須田弥兵衛妻物語』『化野物語』などがある。骨子は『一休骸骨』に由来する。

下野の住人、須田弥兵衛は二五歳の若さで戦死し、これを悲しんだ妻は菩提を弔おうと夫の跡を訪ね歩く。その先で、同じように夫と死別した美女と出会い、互いに慰め合いながら旅を続けようとするが、しかしその女もまもなく病で死んでしまった。弥兵衛の妻は、里人に女の埋葬を頼むが、心ない里人は女の遺骸を野辺に打ち棄てた。やがて朽ちていく美女の遺骸を目にした弥兵衛の妻は、諸行無常の理を悟って出家する。修行にうちこみ、そしてついに往生した。

作者の鈴木正三は、大坂冬の陣・夏の陣にも出陣した二百石の旗本であった。しかし、出家してのちは、唱導を目的とした著作を多く残している。代表的なものに、天草の乱鎮静化を目的として書かれた『破吉利支丹』、諸国遍歴中に見聞した説話を集めたという『因果物語』などがある。『二人比丘尼』は彼の著作の中では最も中世的で物語風の作品である。女性を対象に女性の救済を目的として著述したもの。成立は寛永九年頃とされ、万治初年には初版が出版されたと考えられているが定かではない。

また、絵を重要な要素としている点が特徴的である。これは、美女が病

死し、野辺で朽ち果てていく姿を、『九相詩』に典拠をとって時系列順に克明に描いているためである。『玉造小町壮衰書』などをはじめ、死体が腐乱していく様子を絵にして読者に無常を理解させる手法は、中世以来の仏教唱導の手法であった。そのため、『二人比丘尼』は『須田弥兵衛妻出家絵詞』（東京芸術大学蔵）と題した絵巻も製作されている。

本書の挿絵に關しても、この美女の死体が朽ちていく様を描く場面に、多くの枚数がさかれている。そしてその死体の絵の横には「七日めのてい」「二七日めのてい」と、死体の腐乱時期を表す絵詞が添えられている。他の場面の挿絵にこうした絵詞はみえないことから、この物語における挿絵の眼目が、この『九相詩』的場面にあつたことが窺える。

ただし、本書の場合、版木の磨滅が激しく、特に挿絵に欠損が多い。刊記には、版元名を削った部分があることからみて、寛文四年版の後刷であることが明らかである。

上下巻二冊。本書の元版である寛文四年版のほかに、整版本では、明暦年間版、万治三年版、寛文五年版、寛文年間版、延宝二年版、延宝年間版、宝永五年版、宝永七年版、寛政七年版などを挙げることができ、比較的多く長期にわたり流布したといえる。

なお、本書は、昌平坂学問所記録調所の旧蔵書である。ただしその他に長方陽刻印「亮快」（一・八糎×二・二糎）の押印があり、昌平坂学問所に新収される前の旧蔵者が窺われる。

【書誌】

外題・二人ひくに 上（下）左肩無地料紙墨書（一七・二糎×三・五糎）
内題・二人びくに

表紙・改装縹色布目型押表紙（二五・七糎×一七・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二二丁（七図）、②二三四（九図）

匡郭・四周单边（二一・二糎×一六・二糎）
印記・番外書冊「大学蔵書」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」
「亮快」（長方陽刻印一・八糎×二・二糎）

【刊年・刊行者】

本書の刊記は、本文末尾に以下のようにある。

「寛文四甲辰年三月吉日／板」（②一三ウ）

「板」の上部には不自然な空欄があり、ここに元来あつた版元名が削られたことが窺える。おそらく求版して後刷する際に削ったのだろう。

寛文四年版『二人比丘尼』の版元は、山本九左衛門である。江戸大伝馬町三丁目店を構えた書肆で、曉鷄堂、正本屋、丸屋、草紙屋などと号した。貞享年間ころには、古浄瑠璃正本などを数多く手がけているが、御伽草子や仮名草子の類も多く出版している。本文の末尾の一行に刊記を載せるのが山本一統の特徴で、本書も削られてはいるがその特徴を残す。本書の出版者は定かではないが、山本九左衛門が江戸の書肆であることを考えると、本書の出版地もおそらく江戸であると思われる。

【六七】花の縁物語 寛文六年頃刊 二冊

百井為衡旧蔵「請求番号二〇四・〇〇八〇」

『花の縁物語』は寛文六年三月に成立した仮名草子である。作者は器之子との署名があるが、伝未詳。版本には本書を含む一種しか存在せず、寛文六年に成立してまもなく出版されたものと考えられる。

内容は、御伽草子の流れを汲む恋物語で、特に『鳥部山物語』の内容をなぞる。『鳥部山物語』は、民部卿と藤の弁の男色の悲恋を描いた稚児物

語であるが、『花の縁物語』はそれを本多某守の家臣・左京と京の大和屋の一人娘に改変したものとなっている。登場人物、七五調の道行文、切腹して果てる最期など、近世期らしさを垣間見ることができる。御伽草子と仮名草子の過渡期的作品といえる。

主君・本多某守の供として上京した家臣の左京は、東山の花見で美しい娘に出会う。娘が姉小路の大和屋の一人娘と知った左京は恋焦がれ、従者のはからいで大和屋の隣の老人の家に寄寓することになった。そして、老人の女房が左京のために仲介役となり、ようやく左京は娘と契りを交わすことができた。ところが、左京は、主君の供として東国へと帰ることになり、泣く泣く娘と別れて京を去る。娘は嘆き悲しんだ末に、病に伏す。このことを知った娘の両親は左京を迎えに東国へと下る。そして二人の口から娘の病状を知った左京はすぐに上京の途につくが、伊勢の土山に至り、いよいよ明日京に入るとときに、娘の訃報が届く。左京はとうとう娘の初七日に、娘の墓前で自害してしまった。

『鳥部山物語』では、自害を思いとどまった民部卿は出家遁世する。発心譚の要素の強い『鳥部山物語』との最も大きな違いである。

上下巻二冊。国立国会図書館、天理図書館などにしか所蔵されていない。残存数だけで判断はできないが、おそらくそもその出版部数が少なかつたと思われる。

挿絵の枚数は上下それぞれ三図ずつで、あまり多くないが、人物の風俗が近世のものになっている点は、御伽草子の影響下にありながら仮名草子の性格を強く保持している特徴ともいえる。

なお、本書は百井為衡の旧蔵書。明治一四年に内務省が購入した。それ以前の旧蔵者のものと思われる落書きが各冊の裏見返しにある。「村上五郎衛門」か。

版木の磨滅は少ないが袋とじが開いてしまっている箇所がある。

【書誌】

外題・「花の縁物語 上」「花のえん物語 下」左肩四周双辺刷題簽
(一八・二種×三・七種)

内題・「花の縁物語」

表紙・改装青鈍色雷文繫地唐草文様型押表紙(二六・五種×一九・〇種)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二三丁(三図)、②一六丁(三図)

匡郭・四周単辺(二〇・三種×一四・三種)

印記・「百井文庫」「百井」「好文堂」「大日本帝国図書印」「明治十四年購求」

「内閣文庫」「日本政府図書」

備考・表紙の磨滅が激しく型押文様については推定。

【刊年・刊行者】

本書の本文末尾(②一六ウ)には、次のような奥書がある。

「器之子／寛文六丙午年三月上旬書写」

これによれば、作者・器之子が『花の縁物語』を上梓したのが、寛文六年三月ということになる。しかし、本書には、刊年および刊行者の記載がないため、正確な刊年や版元は不明。おそらく、寛文六年中には出版されたのではないか。出版地も不明だが、版式からして京版か。

【六八】さんげ物語 天和二年刊 三冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇六七」

『さんげ物語』は唱導を目的とする教訓的仮名草子『七人比丘尼』の別名である。善光寺詣りの途上、七人の尼が各々発心に至った理由を語る懺

悔の物語で、読者に、浄土宗・天台宗・日蓮宗・律宗・華嚴宗・禪宗などの基本的教義をわかりやすく紹介しようとしたもの。

貞和のころ、善光寺で念仏修行していた一人の尼が、菩提の種にと、善光寺詣の旅人たちに湯接待を始める。そこに今阿弥陀という尼が訪れ、主の志に感じ入って共に湯接待を行うようになる。そして長月のある夜、客人の五人の尼たちと、主の二人の尼は、一座になってそれぞれ発心の由来を語りだす。ある者は遊女となり無常を感じて出家、ある者は夫と子を一度に失い出家。それぞれの物語を聞くたびに主の尼は、すべて煩惱も苦しきも菩提の種であったと涙する。しかし、彼女たちの物語を聞いていた今阿弥陀は、これを仏教教義で痛烈に批判し、やがて姿をくらましてしまった。彼女は実は入内が決まっていた花山院の姫君で、恋人の花若と難波へ逃げたが、宿の主人が花若を殺して姫を手ごめにしようとしたので、主人を刺殺して尼となった人物だった。

それぞれの発心譚が懺悔としてオムニバス式に語られる。そして、それぞれに主の尼の言葉として、わかりやすく教義の解説がつく。説話集としてのおもしろさを残しつつ、唱導の目的も忘れずに描く教訓的な内容となっている。しかし、折口信夫らの説によれば、御伽草子『三人法師』『高野物語』と同種の中世の唱導文学とし、本書を中世成立の御伽草子だとしている。しかし、本書には古い写本が存在しないため、成立は比較的時代がくだるとみられており、仮名草子であるとするのが一般的。

『七人比丘尼』の初版は寛永一二年で、寛文五年に再版。本書は天和二年に『さんげ物語』と改題して出版された第三版に相当する。三卷三冊。天和版が再版されるにあたり、本文がやや改められ、漢字表記、清濁が加わった。特徴的なのは「はんべり」という語尾が「候」などに改められた点であるが、おそらくこれは天和年間には「はんべり」が聞き慣れない語

になっていたためと思われる。挿絵もまた天和版の新刻で、枚数や箇所の違いがある。

ただし、本文部分に匡郭を持たない版式は似ている。
なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵本。文久三年に新取された。

【書誌】

外題・「女人／さんげ物語 上」(中・下) 中央四周双边刷題簽(一五・〇糎×三・〇糎)

内題・「さんげ物語」

表紙・改装薄浅黄色表紙(二二・五糎×一六・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①二二丁(七図)、②二〇丁(六図)、③三〇丁(一〇図)

匡郭・无边無界、挿絵匡郭・四周双边(一八・〇糎×一三・七糎)

印記・「昌平坂学問所」「文久癸亥」「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

【刊年・刊行者】

③三〇ウに刊記は次のようにある。

「天和二年／辛戌正月吉祥日／万屋庄兵衛」

ただし天和二年は、辛戌ではなく、正確には壬戌。

万屋庄兵衛は江戸の書肆で、延宝頃から元禄頃を中心に活動していたと思われる。延宝四年に出版した『鉢かづき』は多く現存する。

【六九】 竹斎療治之評判 貞享二年刊 一冊

静岡学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇八九」

『竹斎療治之評判』は仮名草子『竹斎』をもとに書かれた一連の『竹斎』

模倣作のひとつである。『竹齋』は、富山道治の手による作品で、医者・竹齋の失敗談を描くことで当世の流行り医者を嘲笑した内容に加え、狂歌的な道行文などでパロディ文学として多くの読者を獲得した。寛永頃には出版されていたと思われ、以降、数度の再版がなされており、この人気に伴って、貞享・元禄頃までに本書のような模倣作が大量に出版されたのである。その多くは「竹齋」という登場人物を借りて、新たなオリジナルの失敗談を描くというもので、これらは「竹齋本」と呼ばれたが、その中で本書は「評判」という題を採った通り、『竹齋』の注釈を中心にしている。とはいえ、学問的な注釈書であるとは言いがたく、「評判」という体裁で、著者が『竹齋』を解説することによって新たな読み、そして著者の意見・思想を表現しようとしたものと思われる。これは明の蕭京の著書『軒岐救正論』を意識したものである。

たとえば『竹齋』では、竹齋は「天下一やぶくすし竹齋」という看板をかけて「扁鵲やぎばにもまさる竹齋をしらぬ人こそあはれなしけれ」と、一見、滑稽で高慢ともとれる添え歌をしてみようのだが、それを本書ではこの自信こそが名医の証であるとし、些細な記述からも裏の意味を読み取るうとしてしている。これはおそらく当初の『竹齋』そのものの意図を超えた解釈であり、本書の作者はあくまでも『竹齋』を借りて自身の主張を述べようとしている。これはこの頃、隆盛を迎えた軍記物の評判書の影響を受けたものと考えられる。

作者は大坂難波の人・円瓢子。奥書によれば貞享元年の冬に本書を書き終えたようである。詳細は定かではないがおそらく医者であろう。

なお、本書は静岡学問所の旧蔵書である。明治維新によって駿府藩に移封となった徳川家により、静岡藩が成立し、その際、設けられた学問所が静岡学問所であった。閉鎖された昌平坂学問所などの旧幕府系の学問所の

教授陣がその中心となり、このとき多くの蔵書も共に静岡へと移ったとみられる。しかし、明治五年の学制施行によって静岡学問所は閉鎖された。ほとんどの蔵書は静岡県庁に引き継がれたが、流出した蔵書も多かったようである。本書はこのとき、皮肉にも明治政府のものとなったかつての紅葉山文庫（内閣文庫）に戻ってきたと思われる。本書には紅葉山文庫旧蔵を示す印記「秘閣図書之章」も押印されているが、これは明治五年に歴史課所管になった際に押されたもので、新収時に押印されたと思われる。

【書誌】

外題・竹齋療治之評判 全一 左肩四周双辺題簽に墨書（一三・六糶×二・九糶）

内題・「竹齋療治之評判」

表紙・改装砥粉色表紙（二一・七糶×一五・五糶）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三七丁（八図）

匡郭・四周単辺（一七・五糶×一四・五糶）

印記・「日本政府図書」（蔵書表）、「秘閣図書之章」「静岡学校」

備考・本文中に朱書で傍点あり。

【刊年・刊行者】

三七ウに記載された刊記は以下の通り。

「貞享二乙丑歳卯月吉日／北御堂前安土町本屋／書林庄太郎開板」

奥書には「貞享元年甲子年冬十一月吉日」とあることから、それから約半年後の翌年四月には本書は刊行されていたことがわかる。

書肆は、毛利田庄太郎。本屋、崇文軒、乾隆堂などと号した。北御堂前安土町本町五丁目に店を構えた大坂の書肆。

【七〇】頼朝三代記 宝永六年刊 四冊

内務省旧蔵「請求番号二〇四・〇一〇五」

別名『頼朝三代軍記』と呼ばれる軍記物のひとつ。『平家物語』や『吾妻鏡』に見られる頼朝以下源氏三代將軍の事跡を抄出し、三代記として物語にまとめたもの。頼朝拳兵から始まり、鎌倉開府、比企の乱、二代將軍頼家死去、和田合戦、三代將軍実朝暗殺などを描き、九条頼経を摂家將軍として鎌倉を迎えるところで終わる。

正徳年間には柳沢騒動を鎌倉時代に置き換えた八文字屋本『頼朝三代鎌倉記』が出版されているが、本書にはまだそのようなパロディ精神や風刺批判などは見られず、ただ純粹に源氏三代將軍の事跡をまとめたもので、先行する軍記物などの古典をなぞる内容に過ぎない。『北条九代記』の巻五の二までの内容をなぞったダイジェスト版ともいえる。初版は延宝八年。版元は不明。本書はその再版である。他には、刊年不明版が現存する。四巻四冊。挿絵はそれぞれ六図ずつ、すべて見開きで、体裁が整えられている。毎半葉一五行の密な版面が特徴。題簽には角書で「頼朝／頼家／実朝」の三人の名前が出されている。なお本書の場合、巻名と函架番号に入れ違いがあり、第二冊目が巻三、第三冊目が巻二となっている。

本書は内務省の旧蔵本だが、それ以前の旧蔵者のものと思われる印記で、長方陽刻印「養閒斎蔵書記」（四・二・四）が押印されている。（この印は所用者不明印として『新編蔵書印譜』に掲載）

【書誌】

外題・「頼朝／頼家／実朝／頼朝三代記」

内題・「頼朝三代記」

表紙・改装紙粉色表紙（二五・五糎×一八・二糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①一五丁（六図）、②一五丁（六図）、③一一丁（六図）、④一三丁（六図）

匡郭・四周単辺（二一・八糎×一七・〇糎）

印記・「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「日本政府図書」「養閒斎蔵書記」備考・②巻三、③巻二で順番が異なっている。

【刊年・刊行者】

④一三ウの刊記は次の通り。

「宝永六乙丑歳九月吉祥日／大坂心斎橋筋安堂寺町秋田屋／大野木市兵衛板行」

版元は宝文堂とも号した秋田屋市兵衛。大坂の書肆で、このころは心斎橋筋安堂寺町五丁目南入西側に店があった。元禄頃には江戸日本橋南一丁目に出店を構えている。

【七一】織唐衣 宝永三年刊 六冊

内藤家旧蔵「請求番号一九〇・二六九」

『織唐衣』は宝永二年に成立した教訓書である。『小学』の趣旨を一五〇〇首ほどの和歌に翻訳し、漢字平仮名交じり文で平易に儒教道徳を解説しようとしたもの。中心となるのは四書五経を中心にした中国の賢人の説話であり、それぞれに挿絵が添えられている。教訓書ではあるが、一種の説話集として読むこともできる。序文には「耄父重信某／六十九歳敬書」の辞があるが、作者については未詳。

書名『織唐衣』については、序文に『続千載集』の和歌に因んだものとするが、身につけるべき道徳について「人の身の糸筋」「染草」などと例

えているところから、人徳を織物のようなものと捉えた作者の考えをも反映したものといえる。

また、巻ごとに題目が立てられている。次の通りである。

- ①「教之巻」、②「倫之巻」、③「敬之巻」、④「啓之巻」、⑤「言之巻」、⑥「行之巻」

これは『小学』の「立教第一」「明倫第二」「敬身第三」「稽古第四」「嘉言第五」「善行第六」に相当したものである。

それぞれにその題目にふさわしい故事が挿絵と共に載せられている。

序文の辞には宝永二年とあるが、出版されたのはその約一年後の宝永三年で、本書はその初版の宝永三年版に相当する。他に、明和七年版が京都大学付属図書館に所蔵されている。全国最大規模であった貸本屋・大野屋惣八の旧蔵書である。

なお本書には、磐城平藩内藤家の蔵書印である分銅型陽刻印「牘庫」が押印されている。元来この蔵書印は藩主・内藤風虎の所用であった。内藤風虎は、著名な歌人・俳人でもあり、江戸藩邸には門流に関わらず多くの文人が集い、無名時代の松尾芭蕉もその末席にあった。また風虎は西山宗因を江戸に招き、江戸に談林俳諧を紹介し、その流行のきっかけを作った人物でもある。近世初期の俳壇の基礎を作ったといえる。和漢書の蒐集家でもあり、その蔵書には「牘庫」の印が使用された。ただし、風虎は、本書の出版よりも以前の貞享二年に没しているため、風虎自身が本書を求めたとは考えにくい。(目録には「内藤風虎旧蔵」の記載があるがしたがって正しくない)

【書誌】

外題・「和歌／絵入／織からきぬ 一(六終)」左肩四周双辺刷題簽
内題・「織唐衣」

表紙・改装縹色表紙(二二・五糎×一六・〇糎)

墨付丁数(うち挿絵枚数)・①一二丁(三図)、②二四丁(六図)、③一二丁(三図)、④一五丁(四図)、⑤三三丁(六図)、⑥三二丁(七図)
匡郭・四周単辺(一八・八糎×一三・〇糎)

印記・「大日本帝国図書館」「日本政府図書」「明治十三年購求」「牘庫」
【刊年・刊行者】

序文の辞には以下のようにある。

「宝永二歳乙酉閏四月廿五日／老父重信某／六十九歳敬書」

したがって本書の序文が書きあげられたのが宝永二年閏四月二五日であるとわかる。一方、⑥三二ウの刊記は次の通り。

「宝永三丙戌年三月吉日／書林／洛下 吉野屋小兵衛／大坂 同 五兵衛」
出版は序文が書かれてからおよそ一年後の宝永三年三月。書肆は、京と大坂の相合版である。京の書肆・吉野屋小兵衛は本書以外の出版記録が見えず、詳細不明。五兵衛と同じ吉野屋一統であろう。大坂の吉野屋五兵衛は、高麗橋西一丁目に店を構えていた。寛文から元禄ころに活動は集中する。

【七二】本朝桜陰比事 元禄二年刊 五冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二二一・〇〇五八」

本書は井原西鶴の手による浮世草子『本朝桜陰比事』の初版である。刊行は元禄二年。五巻五冊である。巻数は「小判一両」「小判式両」と数える趣向。

西鶴はすでにこの前年に『新可笑記』で推理小説風の裁判断を記しているが、このときに集めた資料を使って書き上げたのが本書である。名判官、

訴訟や犯罪を解決する裁判断全四四章から成る。典拠には『板倉政要』『醒睡笑』『北条五代記』『御伽比丘尼』などがあり、これら膨大な資料を素材として当世風に構成しなおした。

登場人物の心理や因果を描き、当世を描いた風俗小説として成功した。同時に、事件の犯人をあぶりだす過程を描くことによって、推理小説としての側面を併せ持つ。また笑話風の短編も多く載せる。すべてを取り合わせて裁判小説として構成し、後の時代にも大きな影響を及ぼした。西鶴の活動時期にとっては中期の作品に相当する。

挿絵は見開きを多く載せる。①九オには作中の登場人物の系図を示すなどの工夫も見られる。每半葉一二行の版式から見ても当時の上方版の特徴を有する。版心の魚尾が特徴的であり、宋代の裁判小説『棠陰比事』を意識した宋版風の装丁と思われる。

版木にはやや磨滅が見られるため、版を重ねたあとの刷りであると想像される。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵本。表紙に「番外書冊」の墨印がある。

【書誌】

外題・「本朝桜陰比事」左肩墨書打付

内題・「本朝桜陰比事」

表紙・改装薄茶色表紙（二五・五糎×一七・八糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二四丁（七図）、②二四丁（八図）、③

二二丁（八図）、④二四丁（八図）、⑥二〇丁（六図）

匡郭・四周单边（一九・八糎×一五・五糎）

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「番外書冊」

備考・版木に磨滅あり。①一一オに将棋の駒の落書きあり。

【刊年・刊行者】

本書の刊記は以下の通りである。（④二〇ウ）

「元禄二年巳正月吉日／江戸日本橋青物町／万屋清兵衛／大坂高麗橋心斎橋筋南入／雁金屋庄左衛門／板行」

本書は江戸・万屋清兵衛と大坂・雁金屋庄左衛門の相合版である。万屋清兵衛は、京の今井重左衛門の江戸出店と考えられている。八文字屋本や西鶴本の江戸販売を一手に請け負っており、本書はそのうちの一冊。天和堂、松葉軒などと号した。雁金屋庄左衛門は大坂高麗橋の書肆で、やはり『一目玉鉢』などの西鶴本を中心に元禄頃に多く出版に携わった。『京阪書籍商史』によれば、享保九年の組合名に「本商売相止候」と載っており、この頃店を閉めたと思われる。

【七四】本朝桜陰比事 元禄二年刊（享保頃後印） 五冊

尾張藩寺社奉行所旧蔵「請求番号二二一・〇〇五九」

本書は前掲書と同版で、享保九年以前に後刷りされたことがわかっている版本である。大きく異なるのは版元で、江戸の万屋清兵衛は同一だが、大坂の書肆として柏原清右衛門の名前が載る。これは、前掲書の刊記の雁金屋の部分を削って入れ木をしたもの。後刷するにあたり版元が変更になったと思われる。雁金屋の廃業と係わりがあるか。

また、本書に特徴的なのは、巻二「京に隠れもなき女房去」に相当する挿絵を欠いている点である。これは落丁ではなく、前掲書②二三ウ・二四オに相当する挿絵をはずして本文を続けている。つまり意図的な改変である。挿絵は女房の嫁入りの様子を描いたものであるため、内容とそぐわないものとはずされたか。

なお、本書は尾張藩の旧蔵書である。各冊一丁目に「尾藩寺社官府蔵書」の印が押印されている。「尾藩寺社官府」は尾張藩の寺社奉行所の漢名。裁判資料として収蔵されていたか。

【書誌】

外題・「絵入／本朝桜陰比事」左肩四周双边刷題簽（一六・一糎×三・五糎）
内題・「本朝桜陰比事」

表紙・改装金茶色表紙（二五・五糎×一八・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・①二四丁（七図）、②二三丁（六図）、③二二丁（八図）、④二四丁（八図）、⑤二〇丁（六図）

匡郭・四周单边（一九・八糎×一五・五糎）

印記・「太政官文庫」「大日本帝国図書印」「内閣文庫」「日本政府図書」「尾藩寺社官府蔵書」

備考・前掲書は②二四丁（八図）。①9才系図。

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り（⑤二〇ウ）

「元禄二年巳正月吉日／江戸日本橋青物町／万屋清兵衛／大坂心齋橋筋順慶町／柏原清右衛門」

江戸日本橋の万屋清兵衛は前掲書と同一。刊記の版本もそのまま利用されている。柏原清右衛門は、称航堂柏原屋清右衛門のこと。古くは延宝七年版『難波雀』に古本屋として記載があり、寛文頃版『酒吞童子』の出版歴もあることからみて、上方でも比較的早くから営業していた書肆である。姓は洪川氏。慶応年間まで、心齋橋筋に店を構え、出版に携わっていた。

【七五】 ゑほうの（かゝみ草） 元禄六年刊 一冊

昌平坂学問所旧蔵「請求番号二〇四・〇〇八八」

本書は元禄六年に江戸の万屋清四郎から出版された浮世草子『ゑほうのかゝみ草』であるが、破損が大きく状態が極めて悪い。何度か修復・改装を重ねて、現在は読むことができる状態になっている。

作者不明。五卷一冊。諸国物語風の奇談集であるが、狂歌なども多く載せ、当世の風刺をも込めた内容である。目録にある各巻の題は以下の通り。（一部欠損）

- ① 「むしくらひ念仏／□」
- ② 「らく馬のはなし／附なか浪人狂歌」
- ③ 「すまあかし／附なか浪人名所狂歌」
- ④ 「ゑびとかにの事／附いせゑあらそひ」
- ⑤ 「茶と酒のろん／□く酒のいとく」

本文には匡郭がなく写本の体裁である。一方、挿絵は四周单边の匡郭（二五・八糎×一四・五糎）を持つ。細い線で細密に描いている画風が特徴的である。版心には丁付があるが、又丁あり。

外題には「恵方のかゝみ草」とあるが、題簽は欠けており、のちの打付書き。また、内題も「ゑほ」以下が欠けているのを、修復の際に墨書で「ゑほうのかゝみ草」と補ったらしい。また一丁目には、もともと墨書で識語があったようである。大きく欠損しており、全体の判別はつかないが、読める範囲で翻刻すると以下の通りになる。

「評曰成程元禄年中出来之□／いつれもかくのことくなる本多くあ□／今享保初年此より□迄之到□／かつてなし□を成し□もあれ／とも寛保迄□むかす元禄／宝永正徳之人□／恵といふ候はあら□／評に不及しらし□

／之人心よりは直□□（一才）

内容からすると享保頃に書かれたものか。欠損の形からみると、もとは一ウに書かれていたものを、修復の際、綴じなおし、一才にしたと思われる。欠損部分は広範囲で、黴の痕もあり水損と思われる。

また刊記の横には墨書で「天保六マテ百四十六年」と落書がある。本書が出版された元禄六年から数えたものらしく、旧蔵者の落書きである。年号から考えてみても、筆跡からみても識語と落書きの筆者は別だと考えられる。

なお、本書は昌平坂学問所の旧蔵。表紙に「番外書冊」の墨書印がある。

【書誌】

外題・「恵方のか、みくさ」左肩墨書打付

内題・「ゑほ（うのかゞみ草）」（※欠損部分を墨書で補っている）

表紙・改装横刷毛目布目型押表紙（二一・四糎×一四・五糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・三五丁（四図）

匡郭・無辺無界、挿絵匡郭・四周单边（二五・八糎×一四・五糎）

印記・「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」「番外書冊」

備考・水損あり。一才に識語あり。三五ウに落書あり。

【刊年・刊行者】

三五ウの刊記は以下の通り。

「元禄六癸酉歳正月吉日／日本橋万町／万屋清四郎板」

万屋清四郎は江戸の書肆で日本橋南詰、万町に店を構えていた。活動の中心は元禄年間で、菱川師宣が絵を入れた『大和名所鑑』の版元である。

【七六】棠大門屋敷 宝永二年刊 一冊

青山堂枇杷磨旧蔵「請求番号二〇四・〇一〇九」

『棠大門屋敷』は、錦文流の手による浮世草子で、宝永二年に五卷五冊で出版された。本書はその宝永二年版に相当するが、合冊されて五卷一冊となっている。

同年五月に奢侈禁止例に触れたかどで闕所となった大坂の豪商・淀屋辰五郎の事件に取材している。そのためか、元題簽では角書に「難波長者」と出しているのが、本書の後題簽では、「淀屋辰五郎」と墨書してある。本書の梗概は以下の通りである。

文禄三年、関白・豊臣秀吉は、木幡山に城を築き帝の御幸を待ったが、大手門のつきあたりには大石があつて牛車が入れないことがわかる。秀吉はこれを取り除き、練塀を造る業者を募集、江戸屋与茂四郎がこれを驚異の安値で落札した。与茂四郎はこれを即日完工させて、秀吉から褒美の品として数々の宝物を賜る。そして、江戸屋は天下一の富豪となった。しかし、実はこの宝物たちには意思があつて、彼らは蔵を脱走しようとして試みる。そのため、江戸屋の後継ぎである与茂九郎をたぶらかして身代を潰させようと画策する。そして、宝物のうちのひとつ金鶏の術によって、与茂九郎は色狂いとなり、連日島原で豪遊する。そしてついに新町大坂屋の遊女・大橋を身請けした。しかし、大橋は男児を産んでもまもなく亡くなる。与茂九郎の色狂いはそれでも治らなかつたが、昼夜の酒がたたつてとうとう没する。江戸屋の家督は、大橋が産んだ息子・与茂三郎が継いだ。しかし、与茂三郎もまた、宝物たちの怨念によって色狂いとなり、放蕩三昧を続ける。その矢先、江戸屋に盗賊が押し入り、五万八千両が奪われた。その晩、与茂三郎の夢枕に亡き母・大橋が立ち、江戸屋の滅亡を予言する。手代の

藤七は、強盗事件は狂言で、奪われた金は与茂三郎の遊興費に使われたのではないかと疑い、一方、与茂三郎は藤七が盗んだと疑い、ついに訴訟となる。奉行の沙汰によって与茂三郎は国払い、他の七人は死罪となった。こうして江戸屋は滅んだが、実はすべてが蔵を脱け出そうとした宝物たちの怨念によって起きた出来事だった。

作者の錦文流は、その出自は不明であるが、浄瑠璃作者・浮世草子作者としてこの当時、一世を風靡した。宝永二年五月に淀屋事件があり、その夏のあいだに本書の出版にこぎつけている。これはタイムリーな題材を用いて、さらに好色物に脚色することによって大衆の人気をさらおうとしたもの。それまで短編小説の形式を保っていた浮世草子は、本書がきっかけで長編化していく。

本書の序文は、錦文流による自筆版下である。

「家にあるしなき時は諸獣住家とす心虚／なるときは人身に禍生ず去によつて人の／愚なるをお留主といふ家亡て後棠の大門／屋敷を問は纔に愚五卷の筆跡物ありて／答はそれに問是を留主ならば醬壺の蓋にせよ／浪花／錦文流／（印）」

刷りは比較的鮮明。初期の版か。飛丁がある。

挿絵は巻ごとに、①七図、②六図、③七図、④五図、⑤五図、配置されており、見開きも多い。絵師は不明だが、当時の浮世草子によく見られる作風である。

なお、本書は、狂歌師・青山堂枇杷磨の旧蔵書である。青山堂は著名な狂歌師でもあったが、江戸小石川の書肆・雁金屋の生まれ（別名・雁金屋清吉）で、蔵書家でもあった。本書の見返しに、青山堂の蔵書印「青山居士千卷文庫」（卷子本型陽刻印）「青山堂」（長方陽刻印）「枇杷麻呂」（正方陽刻印）「酔竹酔門」（正方陰刻印）の四種が押印されている。

そのうち、本書は、昌平坂学問所記録調所の収蔵するところとなったらしく、表紙に「昌平坂」「番外書冊」の二種の墨印を見ることが出来る。淀屋辰五郎事件の資料のひとつとして収集されたものか。

【書誌】

外題・「棠大門屋敷／淀屋／辰五郎」中央黄色雷門型押料紙に墨書（九・八糎×一二・五糎）

内題・「棠大門屋敷」

表紙・改装朱色布目型押表紙（丹表紙）（二五・〇糎×一七・〇糎）

墨付丁数（うち挿絵枚数）・九四丁（三〇〇図）

匡郭・四周单边（二九・四糎×一五・〇糎）

印記・「青山居士千卷文庫」「青山堂」「酔竹酔門」「枇杷麻呂」「昌平坂」

【番外書冊】「浅草文庫」「内閣文庫」「日本政府図書」

備考・①二ウ〜二一オ、②二二オ〜四二ウ、③四三オ〜六三ウ、④六四

オ〜七九ウ、⑤八〇オ〜九四ウ。五卷合冊。

【刊年・刊行者】

刊記は以下の通り。（九四ウ）

「宝永二乙酉年／仲夏吉日／浪花本町二丁目／書林松寿堂／万屋彦太郎／開板」

大坂の書肆・万屋彦太郎（号は松寿堂）は、本町二丁目に店を構えていたが、改題偽版本や再版本ばかりを出していた版元であった。錦文流は宝永年間に専属作者として迎えられて新版本の執筆を請け負った。錦文流の作品は、一作をのぞき、すべて万屋彦太郎から出版されたものである。

（研究員）